

Vol. **189** 2024.夏



特集

《令和6年度》定時総会

連載

【がんばる企業訪問記】
株式会社白石建設

小さな優しい太陽が
夏の日差しを受け止めます。



一般社団法人

日本木造住宅産業協会

CONTENTS

木 芽 Vol.189

夏号
令和6年(2024年)
7月20日発行

折々のひとひら 1



令和6年度 定時総会を開催 2

木住協NOW

「研修企画委員会」会員様への更なるサービス充実に向け活動スタート！ 10

大分県と「木造応急仮設住宅の建設に関する協定」を締結 11

2024年度(第24回)木造ハウジングコーディネーター資格試験および講習会の開催概要 12

国土交通省/木造住宅振興室長 原田佳道氏が、「木造住宅・建築物の振興に関する最近の取組」について講演 13



会員会社ニュースがんばる企業訪問記/株式会社 白石建設(群馬県) 15

木住協NOW

入社内定者の学習機会として木造ハウジングコーディネーター資格制度を活用 19



日本の名城 天守閣ものがたり/犬山城(岐阜県) 21



税務談話室/定額減税 23

支部だより

第37回定時支部総会開催される〈中部支部〉 25

岩手県との連携強化〈東北支部〉 28

御坊市の栄華を今に伝える寺内町とCLTを採用した県内初の公共施設を訪ねて〈近畿支部〉 29

近代建築の中に生きる木の美しさ坂茂氏の建築に学びを求めて湯布院町、大分市へ戸次本町では在町の街並みと歴史を探訪〈近畿支部〉 31

研修見学会〈九州支部〉 35

研修報告書〈九州支部〉 37

木住協NOW

新規会員紹介 44



木の匠 Historia /彦部家住宅〈群馬県桐生市〉 45

『水』・・・水が永遠に流れるところ

真つ青な海を、イルカのように、自由に泳げたら・・・とは、誰しもが思うだろう。しかし、イルカをはじめとする海洋動物・生物自体が、年々、悠々とは泳げぬようになっていと言われているのは、ご承知おきの通りだと思う。彼らたちのその雄姿は、永遠ではなくなるのであろうか。

「永遠」という響きもまた、心を清らかにしてくれる。漢字『永』は、流れる水の象形文字。『永』は、流れる水が合流し、勢いよく流れるところで、つまり、水の流れの長いことをいう。水の流れの長いことから、すべて「ながい」ことを示し、特に、時間の長く久しいという意に使われることが多い。永遠にとは、未来へ果てなく続くことを意味し、その響きも、どこか希望を持たせてくれる音でもある。

そして、漢字『泳』は、そのたつぷりとした水流に乗るように水を渡ることを意味づけてある。さらに、「唄を詠む」というが、漢字『詠』も、また、声を強く長く伸ばして詩歌を歌い上げることを意味する。これらの漢字から、定点にのみ停滞するのではなく、そこを起点にし、より広がり、より進む意味が、込められていることが分かる。

また、「永」の八画の運筆を「永字八法」といい、習字の基礎としての点や払いなど、すべての技法が稽古できる漢字としても、書道の世界では親しまれている。

私達に、かけがいのない水であることはもちろんであるが、漢字の成り立ちに於いても同じく、自然界にある水の様は、意味を託すにふさわしい存在であったことが垣間見られる。

水が、永遠の存在であり続けますよう。

書家・文字文化文筆家 宇佐美 志都



特集

令和6年度 定時総会を開催



さる2024年5月30日、東京都港区元赤坂の明治記念館にて、一般社団法人 日本木造住宅産業協会の令和6年度定時総会を開催した。定時総会では、①令和5年度事業報告に関する件、②同収支決算に関する件、③役員を選任に関する件—の3議案を審議したほか、令和6年度の事業計画及び収支予算に関する報告も行い、それぞれ満場一致で原案通り承認した。

開会の挨拶に立った市川晃会長は、はじめに能登半島地震について、被災者へのお見舞いの言葉を述べ、震災から5カ月が過ぎようとしているが、復旧・復興にはまだ時間を要する状態であり、復興への歩みを加速していかなければならないとの思いを強くしていると語った。その後、ロシアのウクライナ侵攻やガザ地区の混乱、中国不動産バブルの終焉など世界情勢について、依然不透明な状況にあるとしたうえで、住宅業界については、昨年より三省連携で実施された「住宅省エネ2023キャンペーン」により、ZEH住宅の普及や住宅の省エネリフォームが大きく進んだ1年だったと述べ、さらに本年も子育て支援をテーマとした多くの施策が用意されており、厳しい環境下にはあるが、次世代を支える優良ストックづくりに取り組んでいかなければ



開会の挨拶を行う市川会長

ならないとの想いを述べた。また、木住協としては、10支部体制となり地域への貢献活動を展開しているとし、引き続き本部並びに支部の体制を強化し、都道府県・市町村との関係を密に、地域の活性化に貢献できるようにしたいとの決意を語った。定時総会終了後は、令和6年度功労者表彰式、理事会、記者会見のほか、懇親パーティーを開催した。

脱炭素・循環型社会への取り組みや仮設住宅建設で社会に貢献する取り組みをさらに進める

開会あいさつの中で、市川会長は、今後のカーボンニュートラルに向けた活動や、木造仮設住宅建設による復旧・復興支援について、以下のように述べた。

市川会長「2050年カーボンニュートラル実現に向けた住宅性能の一層の向上に向け、2025年から省エネ基準への適合義務化が予定されています。国産材を含む木材利用の促進による脱炭素社会への動きも加速しており、さらには、クリーンウッド法が改正され、2025年より川上の事業者による木材製品の合法性確認が義務化されます。当協会は設立以来、質の高い木造軸組工法の住宅や建築物の開発と普及を進めておりますが、今後も会員の皆様と共に、様々な協会事業を通じて、脱炭素・循環型社会への

取り組みを進めてまいります。

能登半島地震への対応につきましては、木造仮設住宅の建設に向けて、石川県と協定を締結いたしました。今後、具体的な仮設住宅建設に向け、会員企業の皆様にご協力をいただき、被災地の一日も早い復旧・復興に取り組んでいきたいと思っております。

災害時の仮設住宅建設に関する協定については、昨年度は、石川県の他、北海道、岩手県、埼玉県、広島県、宮崎県と締結が進み、宮崎県では河野知事との調印式を行ったところです。引き続き、協定締結に努めるとともに、締結済みの26都道府県とは、具体的な支援準備について協議を進めてまいります。皆様のご協力をお願いいたします。」

市場低迷の中、子育て世代の住宅取得支援や花粉症対策等で木造産業振興へ

続いて、来賓である国土交通省住宅局の山下英和 住宅生産課 課長が祝辞を述べた。初めに、臨席者および木住協会員の様々な立場からの行政への協力と、木住協の長年にわたる地域に根差し環境に配慮した安心安全に暮らせる家づくりへの貢献、木造軸組工法の普及や木造住宅産業の発展に向けた活動に感謝の意を述べた。

そして、能登半島地震の被災者へのお見舞いを述べた後、震災対応について、「応急仮設住宅の建設は着実に進んでおり、既に着工戸数は6,200戸、完成戸数は4200戸を上回っています。今後、震災対応は災害公営住宅や地域型復興住宅の建設を進める段階へと移ってまいります。が、被災された方々が再び住み慣れた土地に戻り、1日も早く元の生活を取り戻すことができるよう、住宅業界の皆様方にも引き続きご尽力いただきますようお願い申し上げます。」と協力を求めた。

また、住宅市場の低迷が続く中、住宅を取得しやすい環境をつくることが重要とし、「昨年度の補正予算において、子育て世帯などによるZEH住宅の取得、住宅の省エネ改修などに対して支援する子育てエコホーム支援事業として、前年を大きく上回る2500億円を確保しています。また、経済産業省と環境省による高断熱仕様、高効率給湯器に対する支援も、前年を上回る予算が確保されております。」と現状の政策を説明した。

さらに、昨年より政府を挙げて取り組む花粉症対策についても、「取り組みの柱の一つが発生源対策であり、花粉の発生源であるスギの伐採を加速化することを目指しています。このためには国産材の需要拡大が必要であり、住宅建築物における木材利用、とりわけ国産材活用の一層の拡大に取り組んでいます。また、新しい取り組みの一つとして、スギなどの国産木材を活用する住宅を表示する国産木材活用住宅ラベルという取り組みを進めています。今後このラベルを活用し、スギを初めとした国産材の活用が進むことを期待しております。」と述べた。

最後に、「このように木材利用の促進、木造住宅建築物の振興に向けて様々な取り組みを進めさせていただいています。引き続き日本木造住宅産業協会の皆様と連携させていただきながら、木造住宅建築物の普及、木造住宅産業の振興に取り組んでまいります。」と述べ、今後の支援と協力を求めた。



来賓祝辞を述べる国土交通省 住宅局
山下英和 住宅生産課 課長



報告・説明を行う加藤専務理事

では関連性があることから一括審議され、加藤専務理事が報告・説明を行った。報告内容は以下の通り。

■第一号議案「令和5年度事業報告」

- 会員の状況について—令和6年3月31日には、正会員585社、賛助会員とあわせて653社となり、昨年度に比べ17社増加した。
- 会議開催について—一定時総会は、令和5年5月25日に明治記念館にて実施した。また、この1年間で、理事会は計4回、運営委員会は計10回を開催。その他、関連団体などの14の主要行事に参加・協賛したことを報告した。引き続き、各事業委員会の事業活動が報告された。各事業委員会の主な活動については以下の通り。

■技術開発委員会

- ① 木造軸組工法による耐火構造等の研究
 - 「木造軸組工法による耐火建築物設計マニュアル」(1時間耐火構造)講習会を東京、大阪、名古屋、金沢にて合計17回開催した。令和5年度の受講修了登録者は合計424名、累計受講修了登録者数は11,245名に達した。
 - 「木造軸組み工法による耐火建築物設計マニュアル」(2時間耐火構造)講習会をWeb講習方式にて合計6回開催した。令和5年度の受講修了登録者は合計34名。
 - 令和5年度の「木造耐火大臣認定書」(写し)(1時間耐火構造)の発行件数は252件であった。累計発行件数は4,594件。2時間耐火構造の大臣認定書(写し)の発行件数は1件。累計発行件数は5件となった。
- ② 木造軸組工法による省令準耐火構造(木住協仕様)の普及
 - 「木造軸組工法による省令準耐火構造の特記仕様書

この後、市川会長が議長に就任し、議事録署名人に宮沢俊哉理事と加藤永専務理事の両氏を指名して議案の審議に入った。第一号議案「令和5年度事業報告に関する件」と第二号議案「令和5年度収支決算に関する件」につい

(木住協仕様)」令和5年度の頒布数は18,239部であった。累計頒布数は373,538部となった。

③ 中大規模木造建築の検討

- 高強度耐力壁・接合金物の開発については、相当壁倍率20倍仕様、15倍仕様の無開口壁、有開口壁の試験を合計13体実施した。柱頭・柱脚接合部の必要性能を検討し、接合部の納まり詳細について検討した。

④ 木造住宅の長寿命化のための改修成功事例集の充実

- 令和5年度も住宅取得者や会員企業を対象とする改修事例の情報発信を目的に、改修成功事例を募集した。全10件の応募があり、グッドリフォーム事例集として取りまとめ、当協会ホームページにWebブック形式にて公開した。

⑤ 法令改正、関連基準整備等への対応

⑥ 関連団体等の外部委員会等への参画及び支部活動支援

■生産技術委員会

① リフォーム関連

- リフォームの工事管理について解説する「リフォーム版施工管理チェックポイントマニュアル」の作成に取り組み、発行後はセミナー実施予定。
- 「既存住宅状況調査技術者」の育成として、「既存住宅状況調査技術者講習」を7月より開催した。終了者数は新規50名、更新313名の計363名となった。

② 生産管理関連

- 「木造軸組工法住宅 施工管理チェックポイントマニュアルの解説」オンラインセミナーを動画配信で開催。

③ 安全衛生・CS関連

- 昨年度に作成した「木造住宅建築の墜転落災害を防止しよう」Web講習をYouTubeにて配信。
- 工事監督向けのCS向上に向けたテキストとして「お客様の不安を安心に変えるコツ」を作成し、セミナー開催を進めている。

④ 建設副産物関連

- 23年10月から有資格者による事前調査実施が義務化されることを受け、石綿関係法令の解説に関する動画配信に加え「石綿法令対応」についてシリーズ化。全7本のセミナー動画を作成。一般公開を実施し毎月2000回から4000回もの視聴をいただき木住協の知名度向上に貢献。

■資材・流通委員会

- ①「住まいのトレンドセミナー」を計8回開催

② 見学会の開催

- 「株式会社 鶴弥 阿久比工場」を視察。
- ③「Select the Best」の発刊(4回/年)
- ④「資産価値のある高耐久住宅研究ワーキンググループ」
- 木住協が考える「高耐久住宅モデル」プランの作成・高耐久資材集の募集と公開。
- ⑤木造住宅等に関わる資材・流通・国産材利用実態の調査
- 第6回国産材利用実態調査のデータをもとに、当協会の住宅会社の平均炭素貯蔵量係数を求め、炭素貯蔵量簡易計算ツールを作成しホームページで公開した。

■業務・広報委員会

- ① 自主統計および着工統計の分析
- 令和4年度の会員の着工数を国土交通省の着工統計と比較し各種分析。アンケート調査を実施し406社が回答。調査内容は8月に報告会を実施し、報告書を正会員各社、国土交通省および報道各社に送付。
- ② 広報活動
- 5月の定時総会、8月の自主統計分析報告会、1月の木造ハウジングコーディネーター優秀者表彰式の際に記者発表を実施。
- 木住協ホームページはサイト訪問件数が増加。
- ③ 作文コンクール
- 10月18日を「木造住宅の日」と定め、第26回「木のあきらみ」作文コンクールを実施。海外4か国4校の日本人学校を含む703校から応募が寄せられ、応募作品は4,792点。
- 朝日小学生新聞、教育新聞、住宅関連業界紙に募集広告掲載。ポスター、チラシを全国小学校、特別支援学校約20,000校、教育委員会、教育センター約1,800カ所に配布。
- 6名の審査員により、10月30日(土)にオンラインによる表彰式を開催。
- 入選作品集を作成し、受賞者の学校へ送付。
- ④ 機関誌「木芽」の発行
- 年4回発刊。

■研修部

- ① 木造ハウジングコーディネーター(木造H C)資格制度の推進。
- 創設以来23回目を迎え、対面型受講者数は97名となった。資格試験は124ヶ所のテストセンターにてデジタル試験を実施し、受験者482名、合格者374名、累計7,130名となった。
- ②「住宅と税金(税制ガイドブック)」の改訂と販売

- (一社)住宅生産団体連合会との共同編集により税制冊子「住宅と税金」を作成し、22,912部を販売。
- ③省令準耐火特記仕様書(木住協仕様)講習会の開催。

■認定事業推進委員会

- ①『木優住宅』取扱事業運営
- 令和5年度の木優住宅の登録実績戸数は、21,052戸となり目標の22,000戸を下回る結果となった。木造住宅検査員講習会は、Web講習を開催し、新規Web講習47名、更新Web講習は199名が登録。登録者総数は、合計521名となった。
- ②『木優住宅』の瑕疵保証事故の抑制
- 「二次防水検査」・「非住宅検査保証」説明会を開催し参加者57名となった。「屋根と壁の取り合い納まり施工実演セミナー」を3会場にて実演講習開催。「事故抑制セミナー」を4年ぶり3会場で開催。
- ③木造軸組工法住宅の管理体制の向上
- 木造住宅検査員の現場における品質管理監査を実施。今年度の監査は1月から3月に実施し19社19名が終了。
- ④「木住協保険」取扱い事業運営
- 「木住協工事総合保険」「業務災害補償プランビジネス」ネクスト」「サイバーリスク・情報漏えい総合保障プラン」を取り扱い。木住協版地盤保険制度では「The PERFECT 10W」が14社登録435棟の実績、「ジャパンホームシールド 地盤サポートシステム[SDS]」が27棟の実績となった。
- ⑤住宅瑕疵担保履行法の対応。

■特命担当

- ① 長期優良住宅対応事業
- 長期優良住宅先導事業において採択された、合計228戸の履歴管理を引き続き行った。
- ② 応急仮設住宅建設に係る検討
- 計26都道府県と協定締結
- 2月29日付けで石川県と木造応急仮設住宅建設にかかる協定を締結。3月28日石川県との打ち合わせを県庁で実施。

■総務・企画

- ① 本部・支部事務局長会議を11月～3月まで毎月Webで開催。

■その他の主要業務

- ① 地方の会員に対する支援強化を含めた活性化と地域貢献



②製材JAS(日本農林規格)改正

③森林を活かす都市の木造化推進協議会

④花粉症対策のための取り組み

●12月19日「国産木材活用住宅ラベル協議会」を設立

●3月13日「国産木材活用住宅ラベル協議会」創設の「国産木材活用住宅ラベル」の利用方法について会員向けに周知。

●関係各社の花粉症対策への取り組み状況を住団連でとりまとめ住団連及び関係団体ホームページで公表。

■ 第二号議案「令和5年度収支決算に関する件」

事業報告に続き、第二号議案「令和5年度 収支決算に関する件」が報告され、正味財産期末残高が379,496,405円になり、収支決算については前年比で23,064,771円減額である事などが説明された。第一号議案と第二号議案の審議を受けて監査報告が行われ、高橋聡監事、殿井一史監事より「厳正な監査を実施し、適正に執行されていることが認められた」との報告があった。この後、市川議長が2議案を諮り、原案通り全員一致で承認した。

■ 第三号議案「役員の選任に関する件」

この後第3号議案「役員の選任に関する件」に審議が移り、新たな理事に高田幸男(南海不動産㈱ 常務取締役総務部長賃貸事業部長)・相馬孝至(㈱土屋ホーム 取締役経営戦略本部 本部長)・中川正輝(㈱日本ハウスホールディングス上席執行役員日本ハウス事業部本部長)・松本佐千夫(㈱LIXIL 取締役)が選任された。

■ 令和6年度事業計画及び収支予算に関する報告

定時総会では、引き続き加藤専務理事が「令和6年度事業計画及び収支予算」を報告した。事業計画では、重要事項として「木造の住宅・建築物の性能・品質等の向上を図り、国民の住生活・住環境の向上、木造住宅・建築物の産業界の発展に寄与するため、技術開発等とともに、会員サービス、地域貢献活動、支部活動等の充実による木造の住宅・建築物に対する社会の認知度の向上に向けて、以下の項目について取り組みを進める。」とし、9項目の事業計画を定めた。

■ 令和6年度事業計画(抜粋)

■ 技術開発委員会

①木造軸組工法技術向上の研究

●木造耐火・準耐火構造:大臣認定書(写し)発行電子化検討、運用対応

●省令準耐火構造:個別企業取得の承認仕様との併用仕様追加検討

■ 生産技術委員会

①リフォーム関連

●施工管理チェックポイントマニュアル(リフォーム版)を活用したセミナー開催

■ 資材・流通委員会

①住宅関連の政策・制度及び新素材・新技術の調査・研究

●建材・住宅設備のLCA算定・EPD取得に関する情報収集とWG立ち上げ準備

②2種会員の商品情報の発信と勉強会の実施

③木造住宅等に関わる資材・流通・国産材利用実態の調査の実施

■ 業務・広報委員会

①自主統計及び着工統計の分析報告書の発行

②作文コンクールの実施

③機関誌「木芽」の発行

■ 研修企画委員会(新設)

①「住宅・税制(ガイドブック)」の改定と発行

②新規講習会・セミナー開催、その他

■ 認定事業推進委員会

①「木優住宅」取扱い事業運営

②「木優住宅」の瑕疵保証事故の抑制

●事故抑制セミナーの実施

■ 特命担当

①災害時の木造応急仮設住宅の対応

●能登半島地震の復旧・復興に対する支援(木造応急仮設住宅関連)

●締結後の県対策協議会等への対応及びシミュレーション訓練等への参加

●応急仮設住宅供給マニュアルの掲載内容の検証

■ 総務・企画

①協会活動の強化

●各支部間および本部支部間の連携の強化充実

●ホームページの運用、管理

一般社団法人 日本木造住宅産業協会 役員名簿

令和6年5月30日現在

役員	氏 名	主たる職業・役職	会員種別	備 考
会長	市川 晃 <small>いちかわ あきら</small>	住友林業株式会社 代表取締役会長	1種A	
副会長	中内 晃次郎 <small>なかうち こうじろう</small>	ポラテック株式会社 代表取締役	1種A	
	脇山 章治 <small>わきやま しょうじ</small>	株式会社北洋建設 取締役最高顧問（九州支部長）	1種A	
	億田 正則 <small>おくだ まさのり</small>	大建工業株式会社 代表取締役 社長執行役員	2種A	
	加藤 永 <small>かとう ひさし</small>	常勤役員		
専務理事	宮沢 俊哉 <small>みやざわ としや</small>	株式会社AQ Group 代表取締役社長	1種A	
	大場 吉恭 <small>おおば よしやす</small>	サーラ住宅株式会社 代表取締役社長	1種A	
	中村 充孝 <small>なかむら みちたか</small>	三交不動産株式会社 代表取締役社長（中部支部長）	1種A	
	岸本 浩一 <small>きしもと ひろかず</small>	積水ハウス株式会社 業務役員 渉外部長	1種A	
	永瀬 俊哉 <small>ながせ としや</small>	大和ハウス工業株式会社 取締役常務執行役員 住宅事業本部長	1種A	
	相馬 孝至 <small>そうま たかし</small>	株式会社土屋ホーム 取締役経営戦略本部 本部長	1種A	新任
	川路 泰三 <small>かわじ たいぞう</small>	ナイス株式会社 取締役 マーケティング渉外統括（神奈川支部長）	1種A	
	高田 幸男 <small>たかだ ゆきお</small>	南海不動産株式会社 常務取締役総務部長賃貸事業部長（近畿支部長）	1種A	新任
	中川 政輝 <small>なかがわ まさてる</small>	株式会社日本ハウスホールディングス上席執行役員 日本ハウス事業部本部長	1種A	新任
	近藤 昭 <small>こんどう あきら</small>	株式会社ヒノキヤグループ 代表取締役社長 CEO	1種A	
	古河 潤一 <small>ふるかわ じゅんいち</small>	古河林業株式会社 代表取締役社長	1種A	
	野村孝一郎 <small>のむら こういちろう</small>	株式会社細田工務店 代表取締役社長	1種A	
	古屋 保巳 <small>ふるや やすみ</small>	ミサワホーム株式会社 取締役専務執行役員	1種A	
	江井 政仁 <small>えねい まさひと</small>	株式会社えねい建設 代表取締役（静岡県支部長）	1種B	
	大和田 整 <small>おおわだ ただし</small>	株式会社 サンゲツ 常務執行役員 事業部門GM	2種A	
	喜多村 円 <small>きたむら まどか</small>	TOTO株式会社 代表取締役会長兼取締役会議長	2種A	
	吉村 恒 <small>よしむら こう</small>	東京ガス株式会社 総合設備事業部長	2種A	
	島村 明 <small>しまむら あきら</small>	株式会社ノダ 顧問	2種A	
	山田 昌司 <small>やまだ まさし</small>	パナソニック ハウジングソリューションズ株式会社 代表取締役 社長執行役員	2種A	
	上森 一郎 <small>うわもり いちろう</small>	吉野石膏株式会社 常務取締役 営業統轄本部長	2種A	
理事	松本 佐夫 <small>まつもと さちお</small>	株式会社LIXIL 取締役	2種A	新任
	堀 秀充 <small>ほり ひでみつ</small>	YKK AP株式会社 代表取締役会長	2種A	
	堀川 智子 <small>ほりかわ ともこ</small>	中国木材株式会社 代表取締役会長（中国支部長）	2種B	
	(28名)			
監事	高橋 聡 <small>たかはし さとる</small>	株式会社一条工務店 執行役員 営業部部長	1種B	
	殿井 一史 <small>とのい かずし</small>	二チ八株式会社 取締役専務執行役員	2種A	
	(2名)			

※（会員種別順 会社名五十音順）



令和6年度功労者表彰式も開催 会員28社と個人19名の功績を顕彰



事業部門で受賞者を代表して表彰を受ける株式会社土屋ホーム 中本和利氏

定時総会の終了後に、令和6年度功労者表彰式を行った。この表彰制度は、協会設立10周年の平成8年に制定され、事業部門で顕著な功績を挙げられた会員企業と、業務部門として本部・支部の運営などに顕著な功績のあった功労者を顕彰するもので、表彰会員企業(者)は先の理事会で承認された。功労者表彰では、下記の通り、木優住宅事業で顕著な功績を挙げられた会員や、工事総合保険事業関係、1時間耐火構造関係、省令準耐火構造関係、木造ハウジングコーディネーター関係などで貢献した会員企業27社が事業部門で表彰された。業務部門表彰では本部や中部支部、近畿支部、九州支部の運営などに尽力し



業務部門で受賞者を代表して表彰を受ける河村電器産業株式会社 田中美奈氏

た19名を功労者として表彰した。事業部門表彰では、受賞会員企業を代表して『省令準耐火構造関係』で受賞した株式会社土屋ホームの中本氏に、業務部門表彰では、受賞者を代表して河村電器産業株式会社の田中氏に、市川会長が感謝状と副賞を授与した。市川会長は、本業で多忙な中、協会・会員のために長年にわたり尽力し貢献されてきた受賞企業・会員に向け、感謝とともに功績を称え、今後の活躍を祈念した。これを受けて株式会社土屋ホームの中本氏が、全受賞企業(者)を代表して、表彰への謝辞を述べた。

令和6年度 功労表彰受賞者

事業部門表彰

一木優住宅事業関係一

(株)オープンハウス・ディベロップメント
(株)ファイブイズホーム
アーレックス(株)
積水ハウス ノイエ(株)
(株)BLISS
日本住建(株)
(株)やまぜんホームズ
(株)ベルクハウス
大洋住宅(株)

一工事総合保険事業関係一

(株)三和建設
國六(株)
(株)グリーンワールド
(株)小林工業
(株)三昭堂

大洋住宅(株)
(株)ブルーハウス
(株)山内住建
(株)山田工務店
(株)ヒカリ住建

一1時間耐火構造関係一

広島建設(株)
一級建築士事務所 設計工房
(株)日本住宅

一省令準耐火構造関係一

(株)土屋ホーム
(株)秀光ビルド
ミサワホーム(株)

一木造ハウジングコーディネーター関係一

(株)AQ Group
住友林業(株)
タカノホーム(株)

業務部門表彰(功労者)

一本部関係一

加藤 久幸 (ポラテック(株))
閻 昌彦 (古河林業(株))
穴原 一範 (株)一条工務店
井出 浩司 (ケイアイスター不動産(株))
中村 正芳 (株)カナナイ
中藤 栄頭 (ポラテック(株))
馬場 久尋 (住友林業(株))
池田 啓輔 (ミサワホーム(株))
田中 美奈 (河村電器産業(株))
五十嵐雅彦 (住友林業(株))
高橋 雅司 (住友林業(株))
小田嶋良一 (前：ポラテック(株))
青柳 博幸 (前：パナソニックハウジングソリューションズ(株))
森松 克典 (大建工業(株))

一支部関係一

中部支部 谷岡 克典 (リンナイ(株))
近畿支部 岡村 慎一 (アキツ工業(株))
河野 友弘 (大和ハウス工業(株))
能勢 幸治 (大建工業(株))
九州支部 岡崎 勝信 (株)岡崎組



理事会と記者会見も開催



格式高い設えの空間で行われた第1回理事会

定時総会と功労者表彰式を終え、明治記念館内の和風の設えが美しい「末広の間」で理事会を開催した。席上、新たに理事に就任した方々を一人ずつ紹介した後、新年度に入って以降の事業執行状況が説明された。

さらに市川会長と副会長、専務理事、運営委員長、運営副委員長、各事業委員長らが加わって、記者会見を開催した。冒頭市川会長は、木住協が設立38年目を迎えた旨を伝え、会員、関係各位への尽力に感謝を述べた。さらに、能登半島地震で甚大な被害を受けた石川県と木造応急仮設住宅建設にかかる協定を締結し、現在具体的な協議を進めていることを報告したうえで、今後も「木のポテンシャル」を活かした木住協の取り組みへの一層の期待と支援を求めた。

その後、加藤専務が令和6年度事業計画の重要事項を説明した。記者陣からは木優住宅建設や、応急仮設住宅に関する今後の展望、運輸業界等の残業制限実施による木造住宅業界への影響等についての質問が寄せられ、木住協側が時間の許す限り各議題について説明を行った。



多くの記者が参加して行われた記者会見

和やかに懇親パーティー

記者会見に引き続き、午後5時から定時総会に出席した会員や来賓、関係諸団体の幹部など大勢が参加し、懇親パーティーを開催した。市川会長による主催者挨拶に続き、来賓からの祝辞が送られ、木住協 脇山副会長の乾杯の音頭で歓談タイムへ。参加者は、和やかな雰囲気の中、会話を楽しみながら親睦を深め、最後は、木住協 中内副会長の締めの挨拶で、盛況のうちに幕を閉じた。



華やかな雰囲気の中行われた、懇親パーティーの様子



- ①主催者挨拶をする 市川会長
- ②祝辞を送る国土交通省 石坂住宅局長
- ③祝辞を送る林野庁 石田木材産業課長
- ④祝辞を送る住宅金融支援機構 毛利理事長
- ⑤祝辞を送る住宅生産団体連合会 芳井会長
- ⑥乾杯の挨拶をする木住協 脇山副会長
- ⑦中締めの挨拶をする木住協 中内副会長



「研修企画委員会」会員様への 更なるサービス充実に向け活動スタート!

令和6年6月11日(火)六本木・木住協本部6F会議室にて、新たに設置された「研修企画委員会」の第一回目の委員会が開催された。同委員会は、4月26日の理事会にて承認された6番目の事業委員会。委員会の事務局は、業務・広報委員会に属した研修部改め、新たに「研修企画推進部(青木部長)」が発足し、委員会の運営窓口として活躍が期待される。今回の委員会には加藤専務理事、佐々木

事務局局長はじめ、委員会設立の主旨に賛同された会員会社12社14名が参加。木住協の各委員会にまたがる研修会や新たなテーマに積極的に取り組む。

会の冒頭、加藤専務理事からは「円安や労働環境の変化が激しい中、会員企業の経営環境も激しく変化しています。社団法人である木住協は、会員企業の皆様へのサービスが基本。今までの研修・セミナーにプラスαの分野やテーマなど、会員各社にどんな情報を提供できるか考えて進める必要がある。今回の委員会設立に至るまで、運営委員会で議論を重ね、理事会で承認いただきスタートとなりました。今回お集まりのメンバーは1種・2種・3種会員の皆様で構成されています。会員様それぞれの特性・分野・規模・業態を踏まえながら新たな研修のアイデア生み出し・運営いただくことを期待したい」とこれからの活動に向けて、大い



左から 青木広美研修企画推進部長・小林正志副委員長・鴛淵正憲委員長・森剛二副委員長

に期待を述べられた。

今回の委員会では、「委員長・副委員長の互選」が行われ、委員長には「鴛淵正憲氏(住友林業(株))」、副委員長には「小林正志氏(ナイス(株))」、「森剛二氏(大建工業(株))」が満場一致で選任された。委員長・副委員長は6月20日に開催された運営委員会の議を経て正式に委嘱された。



委員会設立の経緯を説明する加藤専務理事



第1回研修企画委員会が開催された

大分県と 「木造応急仮設住宅の建設に関する協定」を締結 ー佐藤知事と市川会長が出席のもと締結式を実施ー

木住協は災害救助法に規定する応急仮設住宅の建設について、大分県との間で「災害時における木造の応急仮設住宅の建設に関する協定」を締結し、7月4日に締結式を行った。

九州エリアでは6件目の締結となった。

大分県庁本館にて午前10時から行われた締結式には、大分県側から佐藤知事のほか五ノ谷土木建築部長が、木住協側からは市川会長のほか、脇山章治・副会長兼九州支部長と三浦寿雄・大分県応急仮設幹事が参加し、大分県・木住協関係者が見守る中で進められた。

協定を書面で結んだ後、佐藤樹一郎知事は、あいさつの中で、「大分県もしばしば災害に見舞われており、半年前の能登半島地震を見ても住むところを確保することが大変重要と考えている。災害時に早急に応急仮設住宅を整備する体制をつくることは、我々にとって重要と考えている。協定を結んでいただいたことは大変ありがたく、引き続きご協力をいただき県民の安全・安心に向けてさらに取り組みたい」と感謝をこめて述べられた。

市川会長からも、関係各位への感謝が述べられ、「13年前の東日本大震災の際には、政府の要請を受け、木住協会員会社の協力のもと、1,596戸の木造応急仮設住宅を建設した。この経験を踏まえ、各地域の会員の協力のもと、全国で応急仮設住宅の協定締結を進めている。木住協の強みは、建設業者だけでなく、木材プレカット業者・流通業者・



厳粛な雰囲気の中、協定の締結式が行われた

資材メーカーなど全国に展開する多彩な企業が会員であること。いざ災害が起こった際に、住民の皆様がすごされる木造による仮設住宅の迅速な建設をすすめる協定は大変意義深いものと考えている。協定の締結はゴールではなくスタートであり、これからも県と日々協議を重ねていきたい。木住協は防災だけでなく地域のより良い街づくりや、良質な木造住宅の普及促進にも力を入れており、皆様のご協力をいただきしっかりやっていきたい」と述べられた。

また、締結式終了後、市川会長は、地元メディアの記者の取材に「最近の仮設住宅は被災者が長く住む状況が増えており、中長期的に住むことを考えると木造の仮設住宅を建てることは重要だと思う」と想いを述べられた。

木住協は、各都道府県との間で「災害時における木造応急仮設住宅の建設に関する協定」の締結を進めており、大分県で27都道府県との締結となった。



協定を締結し、意義深い1日となった



左から：佐々木陽一事務局長、梅木孝範運営委員長、三浦大分県幹事、市川晃会長、佐藤樹一郎知事、梶原正雄九州支部員、脇山章二九州支部長、清水信吾九州支部事務局長、加藤永専務理事、大庭伸一郎住友林業株大分支店長



2024年度(第24回) 木造ハウジングコーディネーター資格試験 および講習会の開催概要

講習会は対面型に加え、長期間WEB配信いたします。資格試験は全国約200か所のテストセンターを活用したデジタル試験といたします。また、実際のデジタル試験を想定したWEBによる「想定問題集」を提供します。

木造軸組工法住宅の基本から、設計・施工にわたる知識を広く学んでいただき、お客様から信頼される人材の育成やスキルアップを目指し、ベテランから新人までより多くの受験者を募っています。

講習会

対面型(2日間連続)

- 大阪会場(大阪市) 9月5日(木)・6日(金)
- 愛知会場(名古屋市) 9月9日(月)・10日(火)
- 東京会場(港区) 9月11日(水)・12日(木)

※対面型の受講者はWEB型も受講できます。

WEB型

配信期間：10月10日(木)～11月30日(土)

※配信期間中、都合の良い時間帯で繰り返し受講できます。

資格試験

試験日：2024年12月3日(火)または4日(水)

試験時間：営業編・技術編 各最大60分

出題数：営業編・技術編 各200問

解答方式：二択(○×)式

会場：全国約200か所の

テストセンターにてデジタル試験

各自で試験日時を選択し予約

(開場時間：午前10～午後8時)

費用 (税込)

A1	試験のみ(テキスト付)	会員	24,200円
A2	試験のみ(テキスト無)	会員	13,200円
B	講習会＋試験(テキスト付)	会員	38,500円
S	学生(学生証等証明書必要)	講習会＋試験(テキスト付)	

新設!

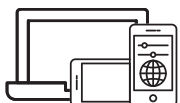
非会員	33,000円
非会員	17,600円
非会員	52,800円
学割	13,200円



スマホでのお申込みは
こちらから

木造ハウジングコーディネーター講習会・資格試験

「テキスト・問題集」 の電子化



PC・スマホ・タブレット
があれば、どこでもOK



決められた期間の
好きな時間に受けられるので
時間に無駄がありません



「想定問題集」のデジタル化により
学習のしやすさで学力アップ



自宅や職場で受講できるので
移動不要で出費削減



分かりやすいカリキュラムで
シンプルで学びやすい

学び方のご提案

資格試験会場は 全国テストセンター



全国に多数の会場を用意
主要都市には複数の会場



お好きな試験会場で受験
試験は紙からデジタルへ



試験室はソーシャルディスタンス
安心して受験できます



一般社団法人

日本木造住宅産業協会

<https://www.mokujukyo.or.jp>

木住協

検索



国土交通省／木造住宅振興室長 原田佳道氏が、 「木造住宅・建築物の振興に関する最近の取組」 について講演

資材・流通委員会(入山朋之委員長)は、令和6年度第1回の「住まいのトレンドセミナー」を4月2日にZoomセミナーとして開催し、国土交通省の原田 佳道・木造住宅振興室長が「木造住宅・建築物の振興に関する最近の取組」をテーマに講演しました。

原田室長は、はじめに、住宅建築への木材利用の現状と木材利用の意義について説明しました。

現在日本の人工林の半分は50年生を超えて利用期を迎えており、この木材を有効活用するとともに、森林の循環利用を進めることが求められている中で、建築物における木材利用の意義として次の3つが挙げられるとしました。

- ①安定的かつ持続的な「伐って、使って、植える」の循環により、森林による二酸化炭素の吸収作用の保全と強化。
- ②製造過程での環境負荷が大きい化石資源の代替により、二酸化炭素の排出の抑制等。
- ③林業・木材産業の持続的健全な発展を通じた、山村その他の地域経済の活性化。

こうした観点から、建築分野では省エネ対策に加えて、木材利用についても社会的要請が高まっているとしました。

また、民間企業においてもSDGsやESG投資の観点から木造化への取り組みの機運が高まっていると説明。中高層建築物の木造化の事例も増えており、民間による木材利用の取り組みが進んでいるとしました。

さらに、民間建築の木造化を促進する動きとして、令和3年に「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」(通称、都市(ま

ち)の木造化推進法)が改正。基本理念に上記の3つの木材利用の意義が位置づけ

られたほか、木材利用に取り組む対象が公共建築物から民間建築物を含む建築物一般に拡大されたと説明しました。

原田室長は次に、国土交通省による住宅・建築物への木材利用の促進への取り組みについて説明しました。

木材利用の促進の取り組みとして、「規制の合理化」「先進的な技術の普及の促進等」「住宅における木材の利用の促進」という3つのカテゴリーで取り組みを行っているとの説明。それぞれについて詳しく解説しました。

「規制の合理化」については、実験で得られた科学的知見等により安全性の確認を行い、構造関係及び防火関係の規制を順次合理化していると説明。CLTに関する基準の拡大や、4月に施行された大規模建築物でも木材を活用しやすくなる防火規制の合理化など、具体的な例を挙げました。

「先進的な技術の普及の促進等」に関しては、優良なプロジェクトや設計者の育成に対して支援し、中大規模木



造建築物の整備を促進していると説明。その取り組みとして、優良木造建築物等整備推進事業による補助、都市木造建築物設計支援事業による設計者向け講習会の開催、中大規模木造建築ポータルサイトによる設計情報等の提供など、さまざまな施策を講じているとしました。また、地域の建設業者や工務店が木造化に取り組めるよう、広く展開できる「構法」とそれとあわせた「部材供給の枠組み」を取りまとめる「中大木造建築普及加速化プロジェクト」など、中大規模木造建築の普及を図るために現在検討している取り組みについても紹介しました。

「住宅における木材の利用の促進」については、子育て世帯・若者夫婦世帯による高い省エネ性能を有する新築住宅の取得や住宅の省エネ改修等に対して支援を行う子育てエコホーム支援事業、住宅ローン減税の見直しなどについて説明。また、令和3年のウッドショックを踏まえ、中小工務店、建材流通事業者、製材事業者、原木提供者など関係事業者が連携し安定的な木材確保に寄与するモデルづくりにも取り組みんだと述べました。

また、木造住宅の担い手である大工技能者の減少・高齢化への対応として、有識者、建築大工関係団体等により構成する「建築大工技能者等検討会」による検討や、民間団体等が実施する大工技能者等の確保・育成の取り組みに対する支援について説明。建築大工技能者等検討会の取り組みの成果として、大工の魅力発信や大工育成に役立つ情報を発信するウェブサイト「大工になろうNET」「大工を育てるNET」の構築について紹介しました。

さらに、花粉症対策のうちのスギ材需要の拡大の取り組みの一環として、国産材を活用した住宅に係る表示の仕組みである「国産木材活用住宅ラベル」などについて説明。花粉症対策だけでなく、カーボンニュートラルや地域活性化の観点からも国産材、地域材の活用につながっていく取り組みであると述べました。

続いて原田室長は、木造建築物にも関わる「建築物省エネ法」と「建築基準法」の改正について説明を行いました。

「建築物省エネ法」の改正については、2050年のカーボンニュートラル実現に向けた取り組みのひとつとして行われたものであり、来年施行予定の、すべての新築建築物の省エネ基準適合義務化や、今年4月から開始されている省エネ性能表示の導入などが主な内容であることを説明。

「建築基準法」の改正については、4月に施行された防火規制の合理化に加え、来年には簡易な構造計算で建築できる3階建て木造建築物の範囲の拡大、いわゆる4号特例の見直しや壁量基準等の見直しが予定されていることについて説明しました。

また、これら改正法への適切な対応を支援するため、説明会や講習会の開催、ホームページでの情報提供、相談窓口の設置など、さまざまな取り組みを行っており、関係者はこれらの支援策を活用しながら改正法への対応を進める必要があるとしました。

そのほか、原田室長は、令和6年1月1日に発生した能登半島地震への対応についても紹介しました。

今回の地震では古い木造住宅等に多数の被害が生じたことから、国土交通省及び建築研究所では、建築構造の専門家等からなる有識者会議において、建築物の被害状況の把握及び被害原因の詳細な分析を行うとともに、分析を踏まえた対策の方向性の検討を開始しており、秋ごろに検討結果を取りまとめる予定だと説明。

また、被災者の住まいの確保の取り組みの進捗状況についても説明。多数の仮設住宅が建設予定の中、木造の仮設住宅も建設が進められていること、石川県では木造仮設住宅の恒久利用への転換も視野にいれていることなどを紹介しました。

最後に原田室長は、「林野庁をはじめとする関係省庁や地方公共団体、民間の事業者らと連携し、引き続き木造建築の促進に取り組んでいきたい」と話し、講演を終えました。

伝統と革新を併せ持つ地元企業 明日の住まいの「基本性能」に挑戦する

株式会社 白石建設（群馬県）

Interview

群馬県太田市内東武鉄道桐生線藪塚駅からクルマで南西に10分ほど。群馬県道69号線(銅街道)から200メートルほど奥まった市街地に株式会社白石建設がある。藪塚本町(現・太田市)大原で祖父の代から大工を家業としていたこの地で、父・白石昌一会長が白石建設を設立したのは1973年のことである。その後、東北自動車道、関越自動車道の群馬延伸に並行して桐生・太田市周辺地域に企業の大規模工場の誘致が相次ぐと、分譲地の造成が急ピッチで進められた。これを追い風として、新築戸建て注文住宅の会社としての誠実な仕事ぶりが評判となり、白石建設は、1990年代には地元の有力企業へと成長していった。

2000年以降は、市町合併、人口減、生活様式の変化など、経営の難しい舵取りが求められる時勢が続いている。こうした中で、先代を引き継いで老舗企業の経営を任された白石典之社長に、会社への想い、事業内容、現在の課題、将来への抱負などについて伺った。

代表取締役
白石典之氏



帰郷して 父親の経営する会社に入社したのは32歳の時

白石典之社長は、会社の跡継ぎとしての自覚と、自分自身の生き方との折り合いを求めて試行錯誤の青年期を過ごし

たという。高校時代に分子生物学に興味を抱いて利根川進教授を輩出した京都大学理学部進学を志したが、お客様や社員、会社はどうするのかと親に言われ、入ったら興味が湧くかもしれないと結局京都大学工学部建築学科に進学した。

「建築学教室には著名な設計の先生たちが卒業生にいらっちゃって、私もある有名な設計事務所にアルバイトに行って建物の模型をつくるのを手伝ったり、京都市内の有名建築等を見て回ったりもしたのですが、建築への想いが無い事の再確認をただけで自分のやりた



い仕事は何なのかなあ?という思いが残りました」。

そんな想いを抱えながらも家業を継ぐための修業場所として、新卒で大阪に本社のある分譲住宅会社に入社した。設計を志望したが営業に回され、モデルハウスで見学者の案内にあたる日々……、お客様に喜んでいただきそれなりに充実していたが、何か物足りなさを感じていた。その様な中、不動産投資の業界を知って面白そうだと今度は不動産投資の会社に就職した。勤務地は東京・大手町のオフィスビルで派手な不動産ベンチャーの世界だった。売上優先の会社の方針に何の為に仕事をしているのか、自問自答の日々を過ごし悶々としていた。東京での暮らしにも馴染むことはできなかった。

「故郷に帰って父の会社で働こうと決心したのは32歳のことでした。社長である父親の背中を追いかけてながら、住宅の建築現場での仕事を手伝い、住宅展示場でベテランの営業の人たちといっしょにお客様の声に耳を傾けました」。

そこで気づいたのは、白石建設が地元で信頼される理由は誠実で丁寧な仕事ぶりであるということ。そして、これが社風として社員全員に行きわたっているということだった。しかし、同時に、大小問わず県内外からのライバル進出、少子高齢化による人口減という将来への懸念も感じずにはいられなかった。実際



に、地元である桐生・太田市周辺地域の住宅着工件数は減少しており、それにもかかわらず競合他社が次々に幹線道路沿いにモデルハウスを開設したり、あちこちで建売分譲を展開したりして積極的な営業活動を展開するようになっていた。

白石建設の社長として 難しい経営の舵取りを 任される

約二年前、47歳の時に先代を引き継いで白石建設の社長に就任した。難しい経営の舵取りを任された形だった。数年前から事業承継することを見越して、白石典之社長は会社の強みをどこに求めるかという課題について考察していたという。

「白石建設は木にこだわった家づくりでお客様と一緒に夢を叶えるお手伝いをしてきました。時代が移り変わったとしても、いい家に求められる普遍的な定義は「基本性能」だと私は考えまし



た。そして、明日の住まいを設計する当社のモデルプランとして「スーパーウォール工法住宅」を打ち出すことにしました」。

「スーパーウォール工法住宅」は、天井・壁・床が一体化したモノコック構造で魔法瓶のような断熱・気密性能、耐震性能があり、これに「全館空調YUCACOシステム」による高性能な空調・換気システムを搭載することで、夏は涼しく冬は暖かく、24時間換気で部屋の空気がいつでもクリーンに保つことができ、しかも光熱費にかかわるランニングコストが格安というメリットもある。

2019年に太田市の住宅展示場にモデルハウスを開設して、白石典之社長

が自ら先頭に立って営業して堅実な実績を上げてきた。ところが、会社の業績を支えるベテランの営業メンバーから「安くなければ売れない」という声が上がってきた。スーパーウォール工法と言い、YUCACOシステムと言い、住まいの快適性・耐震・省エネなどに関心の高い方はくわしく話を聞いてくれるが、フルスペック仕様になると建築費用もかなり高額になってしまう。

ここで、白石典之社長は基本性能を犠牲にせずコストを抑えるために新たな決断をする。昨年春、住宅フランチャイズを展開するエースホームに加盟して、本年(2024年)4月「モデルハウス『NOON』(ZEH)」をオープンした。ZEH(ゼッチ)とはネット・ゼロ・エネ

ルギー・ハウスのこと。若いファミリー層にも手が届く価格帯のコンパクトな設計ながら、デザイン性が高く、スペースパフォーマンスも優れており、しかも省エネ・快適性能としてHEAT20 G2をクリアする断熱仕様、耐震等級3の高い耐震性を備え、6.8kWの太陽光発電パネルを搭載している。

明日の住まいの「基本性能」を追求する家づくり集団

これにより、明日の住まいに求められる「基本性能」において、白石建設は群馬県県内でも傑出した存在になったと言える。

2024年4月現在の社員数は16名。建築営業3名、設計4名、大工1名、パート4名、このほか経理・総務・広報ほかの担当に分かれているが、社長をはじめいくつかの仕事を兼務しており、結束力の高い家づくり集団ということができる。



木住協については、10年ほど前に省令準耐火の優遇制度が改定された時期に、木住協の特記仕様書に真壁和室仕様が追加承認されているのを知り、これをきっかけに加入を決めた。木にこだわった家づくりをしているため、それ以降もいろいろな制度を活用して役立っているとのこと。

白石典之社長のプライベートは、奥様と中二・小五・小三の男の子3人の5人暮らし。土日も仕事で忙しく普段は家族サービスがあまりできないので、年末年始や夏休みに、学生時代を過ごした京都や奥様の実家のある山口県に家族旅行をするのが楽しみであると言う。

最後に、白石典之社長に将来への抱負を伺った。

「近年では、賃貸住宅や店舗、小規模オフィスにも環境基準と快適性を志向する傾向が強くなってきているように感じます。今後は不動産の総合窓口として、会社の寮や高性能賃貸アパートの提供のほかに、非住宅分野への事業も推し進めていきたいと考えています」。

最高水準まで高めた暮らしの性能……、白石建設の明日の住まいづくりへの挑戦はいよいよ本格始動したばかりである。将来の活躍に期待したい。

Company Profile

【会社概要】

株式会社 白石建設
代表取締役 白石 典之
所在地
〒379-2304 群馬県太田市大原町108
TEL 0277-78-2819

【会社沿革】

1946年3月 創業
1973年6月 会社設立
1998年10月 上毛新聞マイホームプラザ
桐生展示場出展
2003年4月 上毛新聞マイホームプラザ
新太田会場出展
2007年7月 TBSハウジング新太田会場出展
2011年4月 上毛新聞マイホームプラザ
太田住宅公園出展
2014年11月 TBSハウジング
イオンモール太田会場出展
2019年1月 上毛新聞マイホームプラザ
FunLab出展
2024年4月 モデルハウス『NOON』オープン

【事業内容】

新築工事・リフォーム工事

ピカイチ社員



営業部 部長 澤田 隆さん

Q.入社の際緯と 現在の業務内容は？

28歳の時に地元のゴルフ練習場の仕事を辞めて、太田市の職業安定所で白石建設の面接を受けるように勧められたのがきっかけです。住宅建築業界は初めてなので、最初の一年は現場の片付けや清掃をやって勉強させていただきました。その後は、県の分譲地にへばりついてお客様へお声掛けをする日々……。後は先代の社長に同行してもらうのですが、お客様のお話を伺いながら、その場でプランをまとめ、簡単な図面まで作成してしまうという、それは見事なもので、自分も営業の仕事をやりたいと強く思うようになりました。

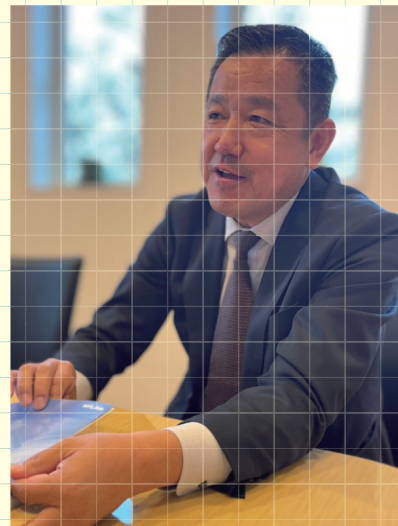
Q.うれしかったことや 成功事例は？

一件目が決まった時は右も左もわからずビギナーズラックみたいところがありました。二件目の成約の時は、お客様から「澤田君、あなたに決めるよ」

と言われて、帰りのクルマの中でガッツポーズをしたくらい、うれしかった記憶があります。その方は亡くなってしまいましたが、最初の何年かはお墓にそれとなく花を置いたりしてきました。私のこれまでの営業人生を振り返ると、やはりお客様に鍛えられたという実感があります。

Q.仕事でここがけている ことは？

ひたすら誠実であれ！ということです。お客様がどうしたいのか、まずは耳を傾けることから始めたいと思っています。お客様の考えが必ずしも正しいとは限らないですが、押し付けがましくならないように、できるだけやんわりとお話を進めるのも誠実さだと思います。とはいえ、成約できなかったお客様には、あの時何が悪かったのか？もう少しこうすれば良かったのかな？とつねに思います。その時その時、迷いながら何はともあれ、誠実でありたいと思っています。



Q.将来の夢は？

将来の夢といえるかどうかはわかりませんが、とにかく仕事を取りたいですね。会社が年間30棟、35棟やっていた勢いのある景色を皆でもう一度見てみたいという気持ちが強いんです。営業の仕事は達成感があります。いくら忙しくても働きがいがあります。そんな思いを会社全体で共有できる絶頂期がもう一度あれば良いなあ、と思っています。

株式会社 白石建設のこだわりPOINT

長年の経験とノウハウに先進性を加えて
家族にとって本当に過ごしやすい
明日の住まいを提案する

社長のひとこと

いい家に求められる普遍的な定義は「基本性能」
群馬県でも傑出した家づくり集団をめざしたい



入社内定者の学習機会として 木造ハウジングコーディネーター資格制度を活用

タカノホーム株式会社

業務推進部 人財開発室 係長 松井 孝平さん
業務推進部 人財開発室 主任 山林 さおりさん

今回は「木造ハウジングコーディネーター資格試験」の活用事例について、タカノホーム株式会社(本社=富山県富山市今泉西部町7-1、高野二郎社長、1種B会員)の業務推進部人財開発室の松井孝平さん、山林さおりさんにインタビューをお願いしました。竣工したばかりの木の香りが漂う本社研修センターにおいて、お二人に木住協の制度を活用した人材育成への期待と可能性について語っていただきました。

入社前研修として昨年より内定者への資格試験を推進

——毎年、木造ハウジングコーディネーター資格試験をご活用いただいておりますが、特に入社内定者への資格取得を勧められていると伺っております。この辺りの経緯についてお聞かせください。

◆**松井さん** 昨年から入社前研修として、入社内定した学生への木造ハウジングコーディネーターの資格取得試験を活用させていただいております。これから木造住宅にかかわる仕事を始めようとする学生にとっては、基礎から総合的に学べる学習機会が得られることは、とても大きなことだと思います。入社以前の12月に木造ハウジングコーディネーターの資格を取って4月に入社し、半年後の10月に宅地建物取引士などの上位資格を取るというのが、ある意味で理想的な新人社員のステップアップの流れなのかな？と思っています。

——近年では、入社内定者への資格取得を勧める企業も増えています。学生時代になかなか木造住宅について学ぶ機会がないので、木住協として本年度より学生コースというものを新設させていただきました。講習会、テキスト、試験を含めて学割で参加できる仕組みです。もちろん、内定

者も含まれますので、名簿を提出していただければ本部の方でフォローさせていただきます。

◆**松井さん** 当社は、社員の資格取得に力を入れている会社ですし、また、学生自身も早期にポテンシャルの高い資格を得たいという志向が高まっています。そういう意味では、木住協のこの制度は願ってもないものだと思います。

——御社では内定者全員が資格試験の対象だったのでしょうか？

◆**山林さん** 昨年の内定者8名のうち7名が資格試験を受けています。当社の場合、採用が木造住宅部門とゼネコン部門に分かれております。ですから、ゼネコン部門に内定した1名については見合わせさせていただきました。

◆**松井さん** ゼネコン部門に採用された新入社員にとっても、入社後に施工管理技士の学科試験を受験するケースが多いわけですが、それ以前にゼネコンについて基本から総合的に学べる登竜門的な学習機会があれば良いのになあ、と感じています。



業務推進部 人財開発室 係長 松井 孝平さん(後)
業務推進部 人財開発室 主任 山林 さおりさん(前)



本社研修センター

技術編・営業編をバランス良く学べる良き機会

——入社後の所属については、採用の時点で営業職、技術職に決まっているのでしょうか？

◆**山林さん** 当社の場合、営業職か技術職か、面接の段階で希望をもらっており、新人は希望した職種に配属されることになっています。

——木造ハウジングコーディネーター資格は技術編・営業編に科目が分かれています、営業系内定者にとって技術編は専門的すぎるとか、技術系内定者にとって営業編の内容はピンとこないとか、こうした声が上がったりはしていませんか？

◆**松井さん** どの業界でも専門的な知識を持った営業というのが一番求められているものです。当業界においても木造住宅についての技術的知識がなければ、第一線の営業として通用しなくなってきています。同時に、技術職の仕事でも営業についての基本知識や心構えを身に付けておかなければいけない現状です。技術編・営業編がバランス良く同時に学べるのは良いことだと思います。

——内定者以外にも受験されている方が何人かいらっしゃいますよね？

◆**山林さん** これまでは、入社一年目のタイミングで受験することになっていましたので、昨年は新卒組も受験しましたし、第二新卒といわれる異業種からの転職組もいっしょに受験することになりました。

——受験後のフォローアップなどは実施していますか？

◆**山林さん** まずやらなければいけないのは、昨年落ちてしまった人のための再チャレンジへのモチベーションアップですね。

◆**松井さん** 東京、大阪、愛知の大都市で実施している対面講習会では参加者の人員が把握しやすいですが、地方ですとWeb収録を各自で視聴することになりますので、一人ひとりの取り組みについて目を配るのは難しいですね。10月以降のWebによるテキスト学習についても、自主的な取り組みになりますので、やっている人はやっているのでしょうか、皆がきちんと学んでいるのか、とても気になる場所ですね。



◆**山林さん** 私は、入社一年目研修ということで新卒の時に受験しました。数年経った後に、今さら先輩に聞けない技術的なことについて、テキストをめくって自分で調べてみる機会が何回かあって、助けられた記憶があります。

◆**松井さん** 私は異業種からの転職組でしたので、入社して最初の年に受験しました。この業界で仕事をしていくにあたっての大切な通過点という印象でした。この時にひたすら頭に叩き込んだことが、いろいろな場面で役立っていますし、何よりも仕事を進めていく上での自信につながったと思っています。

竣工したばかりの本社研修センター内部は木の香りが漂う



——Webによるテキスト学習へのフォローについては、何かもうひとつ知恵を絞る必要があるかもしれませんね。

◆**松井さん** それと去年は人数が多かったので試験会場への予約受付でバタバタしてしまいました。富山会場の定員が15名、当社だけで10数名受験しましたので、予約が遅れてしまった人を石川会場に割り振ったりしました。

——内定者で今回受験された方から寄せられた感想などがあったらお聞かせください。

◆**松井さん** 当社では、新入社員は名刺に初心者マークが付けられるのですが、その横に「木造ハウジングコーディネーター」という肩書きができてうれしかったという声がありました。お客様との会話のきっかけになれば良いですね。

——最後にお二人の木造ハウジングコーディネーター資格の受験体験もお聞かせください？



犬山城

岐阜県



全国各地に現存する名城は、築城された時代や地形によって様々な外観を持っており、天守閣、櫓、御殿、鎧門など城郭建築についても興味深いものがある。

今回は、日本最古といわれる天守閣が現存している国宝・犬山城についてご紹介しよう。

木曽川南岸の丘に築かれた日本最古の天守閣

「犬山城」は、尾張国と美濃国の境にあり、木曽川南岸沿いの高さ80メートルほどの丘に築かれた平山城である。別名を白帝城、その佇まいが長江流域の丘の上に立つ名勝・白帝城に似ていることから江戸中期の儒学者 荻生徂徠が名付けたという。城郭は、かつて本丸、杉の丸、樅の丸、桐の丸、松の丸を南方に階段状に連ねて配置されていたとされる。現在は、天守閣のみが残されているが、500年近くの歳月を経た日本最古の木造天守であり、国宝に指定された五城のうちの一つである。

「犬山城」は、織田信長の叔父、織田信康によって天文6（1537）年に築城された。この地は、中山道と木曽街道に通じており、木曽川による交易も盛んに行われており、政治、経済の要衝となっていた。また、戦国時代を通して軍事的な重要拠点であり、羽柴秀吉軍と織田信雄・徳川家康連合軍が争った小牧・長久手の戦い、さらに石田三成の西軍と徳川家康の東軍が戦った関ヶ原合戦においても、歴史を動かす舞台となった。江戸時代に入ると、尾張徳川家の重臣であった成瀬正成が城主となり、幕末まで成瀬家の居城となった。

天守最上階の望楼から尾張・美濃両国を一望

さて、「犬山城」の天守構造は、外観は三重、内部は四階地下二階、天守南面と西面に平屋の付櫓（つけやぐら）が付属する複合式で、入母屋造りの瓦屋根の上に三間×四間の望楼部を載せた望楼型天守である。

天守石垣は、野面積みと呼ばれる積み方で高さは5メートルあり、石垣の正面に出入り口が造られている。地下一・二階は穴倉と呼ばれ、天守を支える石垣や太い梁をみることができ、踊り場のある階段で上り下りすることとなる。

一階は、中央部に第一の間、第二の間、上段の間、納戸の間の四室に分けられ、それらを武者走りが取り巻いている。また、石落としという小部屋があり、そこから石を落と

して石垣に取り付いた敵を攻撃するためにつくられたという。

二階は、中央が武具の間で武具棚が備えられ、その周囲を武者走りが巡っている。

三階は、破風^{はふ}の間と呼ばれ、屋根の妻の南北に施されている唐破風は成瀬氏によって増築されたといわれている。

東西には入母屋破風が施されている。屋根の比翼部にある亀の甲羅に桃をのせた形の魔よけも珍しい。

天守最上階の望楼は、高欄^{こうらん}と廻縁^{まわりえん}が廻らされており、尾張・美濃両国の広大な景色を眺めることができる。大棟の両端には守

り神として鯀（しゃち）が取り付けられている。望楼の窓は、突き上げ窓、火打窓、両開き窓など変化に富んでいる。武家風の城郭建築の意匠が定まっておらず、天守閣の装飾はどこか寺院風に施されているのが興味深い。



「犬山城」 国宝 現存天守

天守構造	複合式望楼型三重四階地下二階
別名	白帝城
城郭構造	平山城
建造主	織田信康
建造年	天文6年(1537年)
所在地	〒484-0081 愛知県犬山市犬山北古券65-2
電話	0568-61-1711(犬山城管理事務所)
開館時間	午前9時～午後5時
休館日	年末(12月29日～31日)
入館料	大人550円 小・中学生110円

税務談話室

定額減税

顧問税理士
(税理士法人 下平・櫻井事務所 所長)
下平達夫



賃金上昇が物価高に追いついていない国民の負担を緩和するため、デフレ脱却のための一時的な措置として、令和6年分所得税及び令和6年度分個人住民税の減税が実施されました。

1. 制度の概要

(1) 所得税

① 対象者

定額減税の対象者は、令和6年分所得税の納税者である居住者で、令和6年分の所得税に係る合計所得金額が¹1,805万円（給与収入額で2,000万円）以下である人

② 定額減税の対象となる所得税

定額減税の対象となる所得税は「令和6年分所得税」です

③ 定額減税額

定額減税額は、次の金額の合計額です。ただし、その合計額がその人の「令和6年の所得税額」を超える場合には、控除される金額は、その所得税額が限度となります。

イ. 本人 30,000円

ロ. 同一生計配偶者又は扶養親族 1人につき30,000円

(2) 住民税

① 対象者

定額減税の対象者は、令和5年の所得税の合計所得金額が¹1,805万円（給与収入額で2,000万円）以下である人

② 定額減税の対象となる住民税

定額減税の対象となる住民税は「令和6年度分住民税」

③ 定額減税額

定額減税額は、次の金額の合計額です。ただし、その合計額がその人の「令和6年の住民税」を超える場合には、控除される金額は、その住民税所得割が限度となります

イ. 本人 10,000円

ロ. 同一生計配偶者又は扶養親族 1人につき 10,000円

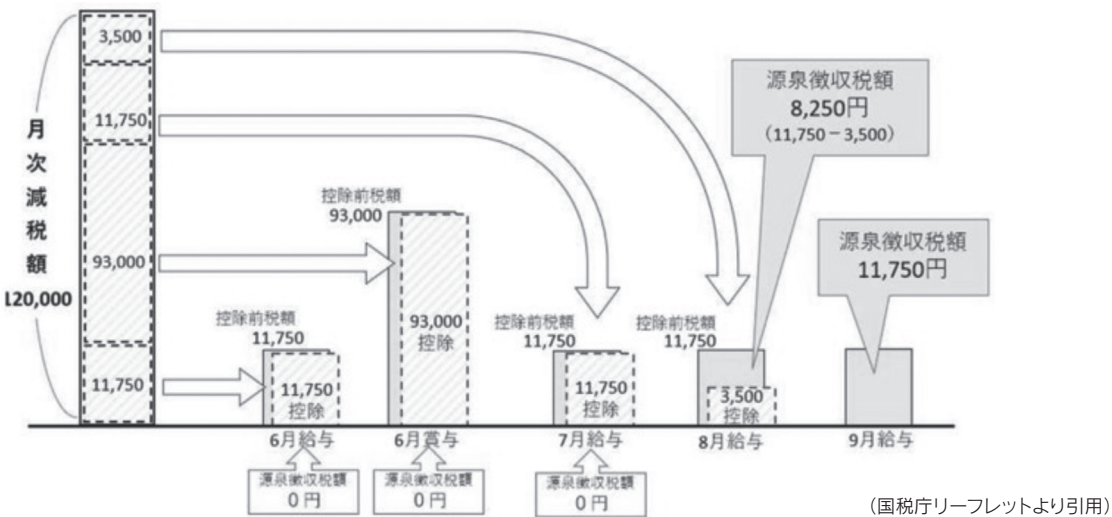
2. 給与所得者の定額減税の実施方法

(1) 所得税

扶養控除等申告書を提出している給与所得者（いわゆる甲欄適用者）については、その主たる給与の支払者のもとで、次により定額減税額の控除が行われます。

令和6年6月1日以後最初に支払を受ける給与等(賞与を含む)に係る源泉徴収税額から控除します。控除しきれない部分の金額については、以後令和6年中に支払う給与等に係る控除前税額から順次控除します。

令和6年の合計所得金額が1,805万円(給与収入額で2,000万円)超であろう人も、年末まで所得が確定しないため、この減税の対象とします。最終的な調整は確定申告で行うこととなります。



(2)住民税

給与所得に係る住民税の徴収は、年間の住民税を毎年6月から翌年の5月までの12か月で均等に徴収することとされていますが、今年は令和6年6月は徴収せず、「定額減税「後」の年税額」を令和6年7月分～令和7年5月分の11か月で均した税額が、徴収されます。

定額減税が適用されない者(令和5年の所得税の合計所得金額が1,805万円(給与収入額で2,000万円)超の者)については、本則どおりの6月から12か月で均等に徴収されます。

納付月	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
通常	1/12	1/12	1/12	1/12	1/12	1/12	1/12	1/12	1/12	1/12	1/12	1/12
特例	×	1/11	1/11	1/11	1/11	1/11	1/11	1/11	1/11	1/11	1/11	1/11

3. 定額減税と住宅ローン控除

所得税及び住民税の定額減税において、納税者本人と同一生計配偶者又は扶養親族の数から算定される減税額(定額減税可能額)が、定額減税を行う前の所得税額・個人住民税の所得割額を上回っており、定額減税しきれないと見込まれる場合は、個人住民税を課税する市区町村が定額減税しきれない差額を給付する仕組みとなっています。

住宅ローン控除は、定額減税より先に適用されますから、住宅ローン控除の後の所得税額・個人住民税の所得割額が発生する者は、住宅ローン控除と定額減税を併用する事ができます。住宅ローン控除の金額を先に控除したことによって定額減税の控除をしきれなかった者(令和6年において住宅ローン控除の適用を受けている者)又は、令和6年の所得税の確定申告によりローン控除を受ける者は、個人住民税を課税する市区町村が定額減税しきれない差額を給付します。

第 37 回定時支部総会開催される

令和6年3月21日（木）名鉄グランドホテルにて第37回定時支部総会が開催された。

中村充孝支部長の挨拶で始まった総会は、前年度の事業報告および収支報告、今年度の事業計画、新役員・委員の承認などが滞りなく行われた。

懇親会・支部長挨拶

一般社団法人 日本木造住宅産業協会

中部支部長 **中村 充孝**

中部支部会員への御礼、さらに「能登半島地震」により、亡くなられた方々のご冥福、被災された皆様へのお見舞いの後、来賓への御礼に引き続き支部活動に関する思いを述べた。

我が国の社会・経済状況は、長引いたコロナ禍からの脱却が図られ、社会経済活動の正常化が進められると共に、インバウンドの回復、日経平均株価の上昇など明るい兆しも見えてきたが一方で、世界的な金融引き締めに伴う海外経済の下振れリスク、ウクライナやパレスチナ問題、アメリカ大統領選挙など、世界的に予断を許さない状況が継続しております。また国内的にも少子高齢化や人口減少をはじめとする構造的かつ深刻な課題も山積しております。そんな中で我々の建築業界の状況は、国土交通省から2024年（本年）1月31日に発表されました2023年の新設住宅着工戸数は、前年比4.6%減と、3年ぶりに減少に転じました。中でも持ち家（注文住宅）は、前年比11.4%減と大きく落ち込み二桁台の減少は2年連続となっております。前年同月実績を割り込むのは2023年12月で25か月連続となります。分譲戸建て住宅は、13万7286戸で前年比6.0%の減少となり、2022年11月以降14か月連続で前年同月実績を割り込んでいます。これらの原因としては、「資材高騰による住宅価格の高止まり」や、「物価高騰に伴う実質賃金の減少」による、「消費者マインドの悪化」が考えられます。我々の住宅業界におきましても、先行きについては非常に不透明な状況にあります。

また、本年の「能登半島地震」や、大きな度重なる自

然災害の発生により、我が国の社会・経済活動を維持していく上で、「防災機能の向上への取り組みが、極めて重要であること」が再認識されております。特に私ども中部地方の「南



海トラフ地震」や「首都直下型地震」等の大規模災害への対応が求められています。そんな中、住宅業界の役割は、ますます大きくなっており、「木住協」としても地震や火災対策等の技術改良により優良住宅の提供を行ってきました。しかしながら風潮として木造住宅は地震や火災に弱いイメージが拭いきれていないと感じております。現在の木造住宅は、地震・火災の対策を施されて安全である事、加えて環境にやさしい住宅である事を理解していただき、木造住宅の普及促進を維持し行っていく必要があります。結果的に良質な住宅にお住まいいただき地域の皆様への貢献となるよう今後もたゆまぬ技術改革と消費者の皆様への周知・PR等の活動を実施してまいります。

木住協として、さまざまな社会問題への対処を押し進めることを「経済成長のエンジン」として、引き続き中部エリアにおける「地域社会・経済の持続的な成長」と「木造住宅の普及促進」に寄与してまいります。

結びにあたりまして、本日ご列席を賜りました皆様へ、感謝を申し上げますとともに、今後とも倍旧のご支援とご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



第37回定時支部総会が行われ、今年度の事業計画、新役員・委員が承認された。

懇親会パーティー

中村支部長の挨拶に続いて、国土交通省中部地方整備局 建政部住宅調整官 塩崎康弘様のご祝辞、一般社団法人愛知県建築住宅センター理事長 海田肇様のご乾杯のご発声で懇親パーティーの幕が開けた。

多くの出席者で賑わう会場では、和やかな雰囲気の中、参加者各位が懇親を深め、有意義な時間となった。牧康広副支部長の中締めにより締めくくられた。

【ご出席いただいたご来賓の方々】

- 国土交通省 中部地方整備局 建政部
住宅調整官 塩崎 康弘様
- 独立行政法人 住宅金融支援機構 東海支店
支店長 田中 淳志様
副支店長 平澤 敦様
- 一般財団法人 愛知県建築住宅センター
理事長 海田 肇様
- 一般社団法人 日本木造住宅産業協会本部
研修部長 青木 広美様



海田肇理事長のご発声で
パーティーがスタート



パーティーで
懇親が深められた



記念講演会

「2代目魚屋の挑戦、デジタルシフトへ」

講師：株式会社寿商店 常務取締役 森 朝奈

通常総会の後、恒例の記念講演会が開催された。今回は、メディアなどでも取り上げられ、SNSでお魚屋さんの日常やお魚のおいしさなどを発信している新時代のお魚屋さん株式会社寿商店 常務取締役・森朝奈さんを講師にお招きし、さまざまなエピソードを交えて、デジタルシフトをテーマにお話いただいた。

「魚屋さんというアナログなイメージがあると思うんですが、なぜデジタルを選択して今商売をしているのかというところについて、インフルエンサーさんとは違う企業のSNSの運用の方法について自論をお話したいなと思います」と、事業承継を行う際にDXデジタルシフトを導入していく過程、そして実際にデジタルシフトDXを活用していくにあたり社内で行っていた事件のお話し、最も力を入れているデジタルシフトでのSNS活用の具体例など、スライドを交えてのお話しに、身を乗り出して聞き入ったり、メモを取ったりする会員が多く見られた。

森氏は「お魚好きを増やしていきたいという気持ちが一番にあるんです」と、魚を手軽に食べていた

だく機会を増やす方法のひとつと考えて、オンラインショップで販売する鮮魚BOX、サカナノバーガーをはじめとしたお店をプロデュース、YouTubeチャンネル「魚屋の森さん」などいろいろな取り組みをしているという。

そんな森さんが自信をつかんだきっかけは、コロナ禍での業績悪化という窮地。まさに、ピンチをチャンスに変えたのだ。「コロナの影響で売り上げは半減し、創業して初めての額の赤字を計上することに。そんなときに考案したのが『鮮魚BOX』という魚の詰め合わせセット。下処理を済ませた魚を、お客様のニーズに合わせて発送するサービスを始めたんです。その結果、コロナ禍以前の150%の売り上げを記録し、大きな自信になりました」という。

また、楽天時代に経験した『判断スピード』と『固定観念の打破』をいつも意識しているのも、森氏の父が語った『今後、インターネットで魚を売る時代が来る』という言葉信じ、自分の信念を貫き、真摯に、あきらめずに挑戦することがいかに大切かということを感じた興味深く、楽しく、ためになる講演会であった。

森 朝奈（もり あさな）プロフィール 株式会社寿商店 常務取締役

愛知県名古屋市出身。早稲田大学国際教養学部卒業後、楽天（現・楽天グループ）へ入社。その後、父親が創業した、鮮度抜群の魚介が地元で評判の「寿商店」に24歳で入社する。現在は常務取締役として、市場での仕入れから下処理・加工、取引先への卸し、飲食店の経営に奔走。魚好きが集える場所としてのYouTubeチャンネル「魚屋の森さん」などのSNSや、ファミリーサロンの運営を行うYouTuberでもある。

魚食と水産業のファン拡大に努める。

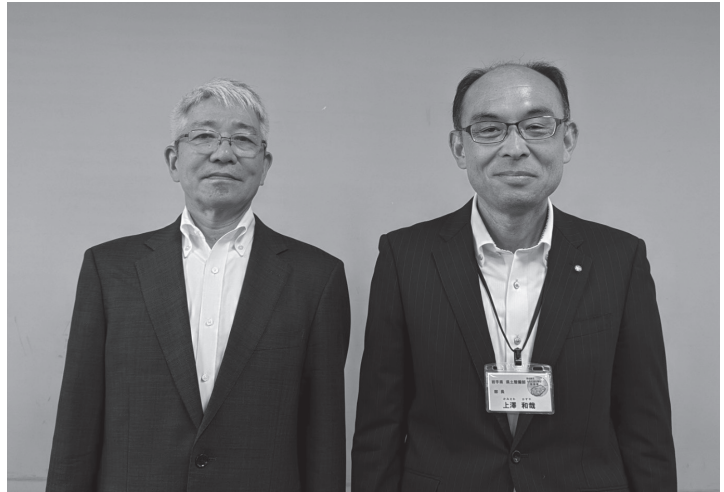


岩手県との連携強化

木住協では、「災害時における応急仮設住宅の建設に関する協定」を全国の都道府県との間で進めており、岩手県とは2024年2月28日(水)付けで正式に協定が締結された。それを受けて、5月10日(金)、東北支部・萩原俊事務局長、本部から加藤永専務理事、佐々木陽一事務局長、高橋雅司参事が岩手県県土整備部を表敬訪問した。

東北支部では、山形県、福島県、宮城県に次いで4県目の締結となり、全国では23番目の締結となった。

表敬にあたり、県庁からは県土整備部の上澤和哉部長をはじめ、岩崎等技監、加藤真司副部長、菅原常彦担当技監、小野寺哲志担当技監と多くの幹部の方々にご出席いただき、上澤和哉部長より岩手県としての災害発生時の対応や応急仮設住宅に対する考え方や木住協をはじめとする協定締結済各団体への要望等についてお話しをお聞きした。木住協からは加藤永専務理事より東日本大震災を含めた木住協のこれまでの応急仮設住宅への取り組み状況や全国都道府県との協定締結状況、今回発生した能登半島地震での応急仮設住宅への対応などについてご報告した。参加いただいた方々からの質疑応答や意見交



左から 加藤永専務理事、上澤和哉岩手県土整備部長

換を行い、最後に列席者全員で記念撮影を行った。

その後、県土整備部建築住宅課の方々と、岩手県における応急仮設住宅建設にあたっての今後の対応方針や具体的な方向性、住宅仕様の考え方、平時における準備体制等について意見交換を行った。課長を交え意見交換は長時間に渡り、県として木住協への期待の高さを感じ取ることが出来る打合せであった。今後も、引き続き密に打ち合わせを行っていく旨を確認し合い終了した。



左から 木住協：高橋雅司参事、佐々木陽一事務局長、萩原俊東北支部事務局長、加藤永専務理事
岩手県庁：上澤和哉部長、岩崎等技監、加藤真司副部長、菅原常彦担当技監、小野寺哲志担当技監

商品・技術委員会主催 研修見学開催 御坊市の栄華を今に伝える寺内町と CLTを採用した県内初の公共施設を訪ねて

近畿支部では5月24日(金)に和歌山県御坊市・上富田町への研修見学会を実施し、会員各社から19名が参加しました。安土桃山時代から江戸時代にかけて日高の御坊様と親しまれた日高別院を中心に繁栄した寺内町。その街並みとその栄華が垣間見える住宅などを見学しました。午後はさらに南に移動して上富田町の県内初のCLTを使った公共施設「岩田公民館」を見学。趣ある寺内町から新建材の建物見学へと時代の異なる木造建築の魅力に触れた一日となりました。

日高御坊(日高別院)の建立が人と物を集め、 物を載せた廻船が行き交い、町は育まれた。 その長い栄華の歴史を今に伝える寺内町

豊臣秀吉の紀州攻めの後、安土桃山時代の文禄4年(1595年)に浄土真宗本願寺の坊舎「日高御坊」(現在の「日高別院」)がこの地に建立されました。以来、坊舎は土地の人々から「日高の御坊様」、「御坊所」と呼ばれて親しまれ、「御坊東町箒はいらぬ、お御堂詣りの裾で掃く」という俗謡があるほど参拝客で賑わい、各地の特産物を扱う問屋や蠟燭・酒・木材問屋や総屋(かせや)・油屋・薬屋・旅籠(はたご)が軒を並べ「寺内町」「在郷町」として栄えたそうです。日高の御坊様と親しまれていたことが御坊市という名の起こりとなりました。浄土真宗の寺院の尊称である「御坊」を冠した行政上の市町村はこの御坊市のみとなっています。

江戸時代、産業の発達とともに商品の取引が活発になると、日高は大坂・江戸間の物品の大量輸送のための大型帆船の拠点となり、後に菱垣廻船へと発展する日高廻船が活躍しはじめます。日高地区の酒や有田みかん、日高蠟(ろう)、などを江戸に運び、帰りには干鰯を積み港町として発展。各商店の商いが大きくなるに従い、家や蔵、店舗、工場などの建物は大きく凝ったものになり、あるいは洋風を取り入れたり、江戸、明治、大正、昭和と時をかけて独特の街



ショーウィンドウがかわいらしい和菓子店「有田屋」。
寺内町を語り継ぐ「語り部」の方が一軒ごとにその特徴を教えてくださいました。



山林業を営んでいた中川家の居宅前。昭和13年に完成した木造住宅は「日高御殿」とも称されていた。南方熊楠も逗留した名家

並みをつくりあげました。

廻船問屋として栄えたベンガラ格子の「堀河屋野村」、政治家田淵豊吉の生家である造り酒屋「伊勢屋」、ショーウィンドウを取り入れた「中松金物店」、大正初期の赤煉瓦壁が残る「日の出紡績」など、少し歩くと見どころが次々と現れます。またそれにまつわる逸話も数多く、港の繁栄とともに商人たちが暮らしや商い中に、常に美しいものや新しい建築を取り入れようとしてきた“商人の気概”を感じるひとときとなりました。この街ではもうひとつ、南海トラフ巨大地震を見据えて津波避難困難地区の解消策として2019年に完成した新しい建造物、津波避難タワーにも登り内部まで見学することができました。



2019年に完成した津波避難タワー。地区のすべての住民690人が収容できる。浸水深想定5.2メートル以上、屋根となるテントや照明、非常食、備蓄品などを備えている



伊勢屋の内部を特別に公開していただいた。かつて酒蔵として多くの人々が働いていた。壁には最後の出荷を記した掲示板も残されている



街の中には、高級住宅街さながらの住宅が次々と現れる。港町として商売が栄え、建物に趣向を凝らす余裕があったことが街並みからわかる

CLTを使った上富田町立 岩田公民館、 紀州材のスギを加工した新建材で 温かみと安心を両立した公共建築

CLTはひき板を繊維方向が直交するように重ねて作った直交集成材。欧州では8～10階建にも活用されており、柱・梁の代わりに壁材等として建物を支えられる頑丈な構造材として使用されています。加工が容易、断熱性、安定性、遮音性、耐火性などに優れ、そのまま内装材にも活用できる等の多くのメリットがあり、なおかつ木材の温かみがあることが大きな特徴です。日本国内でも活用が広がっており、2020年時点では400件ほどの実績が蓄積されました。特に公共施設や学校など、安全性や災害への耐性が求められる建築物の建材としてCLTが近年注目され、和歌山県では2019年に完成した公共施設「上富田町立 岩田公民館」で初めて採用されました。

上富田町の山間部に位置する岩田公民館は、老朽化による建替工事として、木造平屋、延床面積744㎡、集会室、会議室、和室、図書館、調理室などの機能を備えた建物を新築。地域の交流に多くの地元住民が利用するほか、災害時には避難所の役割を担う地域の重要な公共施設として完成しました。CLTのメリットを活かし、構造の主要部分に紀州材のスギを加工したCLTを使用するにあたり、県内で伐採したスギを岡山の工場に送り、加工後、運び戻すという大きなプロジェクトとなりました。

CLTの最大部材は集会室に使

われており壁面
厚150mm×幅
2,000mm×長
6,500mm、屋根

厚150mm×幅2,000mm×長8,730mm、梁 幅150mm×成600mm×長10,900mm。壁の前に立つと大木の前にいるかのような圧倒的な存在感があり、非加工の無垢材と同じように木の香りと温かみを感じられました。「節の出方を選びながら自然な落ち着きのある仕上がりを目指しました」と設計士の山中善道さん（Y・YAMANAKA建築設計事務所）。完成時には県内初のCLTを使った公共建築物として、サステナビリティや林業振興の視点からも多くの注目が集まりました。関係者から、今



集会室に使われている最大部材の前で、CLTを体感する参加者から感嘆の声が聞こえる。室内はスギの香りがふわっと広がり、木造建築を実感

後使ってみたい建材という声も寄せられましたが、課題はコスト。今回は林業・木材産業成長産業化促進対策交付金が活用されました。CLTがさらに普及して使いやすいコストになれば、メリットを活かしたユニークな事例が次々に誕生してくるだろうという期待が広がる見学会となりました。



上富田町役場の主事・築山知弘さんと、設計を担当した山中善道さん（Y・YAMANAKA建築設計事務所）による特別解説。この会議室にもCLTの壁面が採用されている



上富田町の山間部に立つ岩田公民館。赤ちゃんからシニアまで地域の人々が気軽に立ち寄り活用できる施設であり、災害時には地域住民の避難場所となる



完成予想図から、完成までの建築工程を写真で示し、地域の人々の建物の理解につなげている

第35回 幹事・運営委員会合同 研修見学会 近代建築の中に生きる木の美しさ 坂茂氏の建築に学びを求めて湯布院町、大分市へ 戸次本町では在町の街並みと歴史を探訪

近畿支部では6月19日・20日の2日にわたって、恒例の幹事・運営委員会合同見学会を開催しました。今回の研修地は3月に開催された令和5年度 近畿支部定時支部総会開催において講演いただいた坂茂氏の建築を巡り九州、大分県別府市・大分市へ。1日目は湯布院町、由布院駅に並ぶ坂茂氏設計の「由布市ツーリストインフォメーションセンター」と磯崎新氏設計の「由布院駅舎」を見学し、午後は大分市に移動し同じく坂茂氏設計の「大分県立美術館(OPAM)」(大分市)を見学。2日目は大分市戸次地区に江戸時代から続く在町(ざいまち)の賑わいが残る街並みを見学し、20名の参加者は新旧の木造建築の美学に深く触れた研修となりました。また19日には宿泊先にて、令和6年度第1回幹事・運営委員会を開催し、新役員の紹介や今年度の事業計画などが報告・検討されました。

1日目 坂茂氏の建築を巡る

磯崎新氏による「由布院駅舎」、 その隣に佇むのは坂茂氏による森のような 「由布市ツーリストインフォメーションセンター」

由布院駅に着くととても美しい風景が迎えてくれました。1990年に磯崎新氏の設計により建てられた黒い木造の駅舎、隣には2018年に完成したガラス壁とY字の木造柱が森のように立ち並ぶモダンな由布市ツーリストインフォメーションセンター、そして駅舎の正面に広がる鮮やかな緑に覆われたふたこぶの由布岳。2班に分かれて、観光協会の方から駅舎とインフォメーションセンターについて設計の経緯や現状の課題などをご説明いただきました。

先に建てられたのは「由布院駅舎」(1990年竣工)。建築界のノーベル賞といわれるプリツカー賞受賞者、建築家・磯崎新氏の設計によるもの。ポストモダニズム建築の大家として知られる磯崎新氏の建築としては珍しい木造



年間400万人の観光客が訪れる由布院の街のシンボルになっている由布院駅舎。
さまざまな国の人々が列車から降りてくる



由布市ツーリストインフォメーションセンターで研修を受ける20名の参加者

建築のうちのひとつです。緑豊かな景観に馴染むようにと黒い壁でつくられた建物は、イタリア・フィレンツェのメディチ家礼拝堂がモチーフになっていました。高さ約12mの吹き抜けと集成材で構成された交差ヴォールト屋根を持つ中央コンコース、さらに左右対称に広がる大きな屋根の存在が豊かな雰囲気を出していました。この吹き抜けは当初、高さ約20m、街のシンボルとして計画されましたが、由布岳や周辺の景観への配慮から、今の高さに調整されたそう。それにより、木造の優しい気配が街に馴染み、由布院駅を出るとまっさきに見える由布岳の美しさを演出しているかのような調和が生まれていました。しかし、築34年が経過し、大規模な修繕が必要になっている現実も聞かせていただきました。

その由布院駅舎と並んで立つのが、同じくプリツカー賞



駅の内部は外観の黒から反転して白が基調。大屋根の下に設けられたアートホールや中央コンコースにはトップライトから自然光が降り注ぐ

受賞者である坂茂氏設計の「由布市ツーリストインフォメーションセンター」(2018年竣工)です。ツーリストインフォメーション新設と駅前の交通整理を含めたプロポーザルで選出されました。坂茂氏が最初に考えたのは、既に存在する磯崎新氏設計の由布院駅舎と対立することなく、しかし迎合することもない“隣に佇む建築”だったそうです。独自の空間をつくりだすために考えられたのが、日本で加工可能な集成材の2次元加工でつくられたY字型に束ね柱を連続させることで、駅舎の交差ヴォールト屋根に呼応する木造架構でした。

またその束ね柱の連続により森の中にいるような空間をつくり、ガラスの直方体を組み合わせでできる限り透明



1階は観光案内所とオフィス、2階は旅の図書館と展望デッキがあり、誰もが行き来しやすいよう階段ではなくゆるやかな斜路でつながっている



駅前の整備に伴い、実は左右非対称だった由布院駅舎の大屋根は坂氏の提案により左右対称に補正され、左屋根の下に水戸岡鋭治氏によるデザインで化粧室が新設された



由布院駅を出ると真っ直ぐ前に由布院岳が美しく見える。山の高さに対する街の高さの配慮が伺える

にすることで、プラットフォームや車窓から街が透過して見え、建物内部からも駅とつながっているような空間になりました。坂茂氏は建築雑誌で「形態的には単純でシンボリックではないことを意図し、一方、空間に入った時の体験として、地元の木材を使い、木でしかできない空間体験をつくりたい。イメージしたのは木に包まれるような空間」と語っていました。まさに木々が風に揺れる森のような空間で、さまざまな国の人々がくつろぎ、時間を過ごしていました。日本が誇る二人の世界的建築家による二つの建物で、それぞれの木の使い方を感じ、またそれぞれの建物に宿された美学を堪能しました。



由布市ツーリストインフォメーションセンターの外観。木立のような柱は4500mm間隔で21本並べられている

竹細工を模した木組の外観がシンボル、 アートと人々のための開かれた空間として 工夫に満ちる大分県立美術館

実は美術館大国でもある日本。国内には1000を超える美術館があるとされており、その中にはアートを楽しむだけでなく、建築や空間そのものが鑑賞の対象として十分な魅力を備えた素晴らしい美術館も多数あります。坂茂氏による設計で2014年11月に竣工した大分県立美術館、通称OPAM(オーパム／大分市)もその特徴的な美術館のひとつ。OPAMサポーターの非常に詳しい解説とともに、建築の観点から鑑賞しました。

坂氏の設計コンセプトは「街に開かれた縁側としての美術館」。「美術館を楽しみ、何度も日常的に足を運ぶような美術館にする」という坂氏の言葉どおり、1階はフレキシビリティの高い展示ができるよう、メインの展示室とアトリウムは可動壁で自在に面積を変えることができる仕組み。また南側のファサードは全面ガラスの水平折戸になっており、高さ最大5mまであげると長さ80mの巨大な縁側ができる仕掛けが施されていました。アトリウムが外と一体化したパブリックスペースになることで美術館は街と一体化し、人々が自由に自然に入ってこられるように工夫されていました。

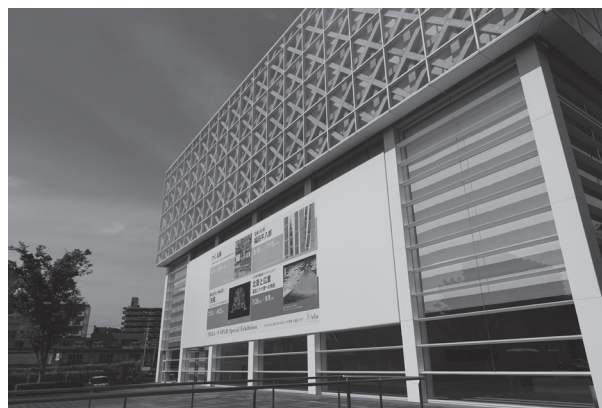
また、坂茂氏は大分県を代表する工芸、竹細工をイメー



参加者はOPAMサポーターによる詳細かつ誇りに満ちた解説に聞き入り、館内に次々と現れる坂氏の工夫に感嘆の声が沸き起こっていた



坂氏の代名詞でもある紙管を使った家具や什器がたくさん使われている。実際に触れてみるとずっしり重く安定感がある



大分の工芸・竹細工を木組で再現した外観が特徴的。
大きなスクリーンは館内に差し込む西日を遮る役割も兼ねている



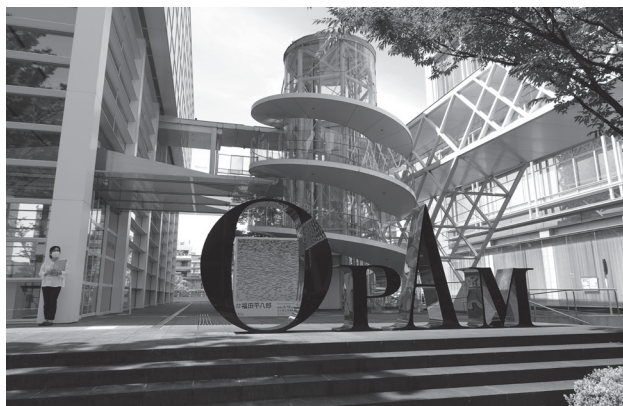
美術館の建築的特徴を案内する建築案内図
「ドキドキ、ワクワク OPAM一周の旅へ」と題した
木組がデザインとし
ハンドアウトも見応えたっぷり

ジした木組を外観
や最上階の天井、屋
根の一部に取り入
れていました。鉄骨
造一部鉄筋コンク
リート造の建物に、

ての柔らかさとリズムを醸し出し、また同時に耐火性を高めたり、遮光性を高める機能のひとつにもなっていました。参加者は美術館という研ぎ澄まされた空間のそこかしこに施された建物の工夫に聞き入り、細部に見入り、充実した研修となりました。



最上階3階のホワイエ天井と一部屋根に、大分県産の杉を使用して、竹細工をイメージした木組を採用。同階に外観の木組を間近に見られる場所もある



県立複合文化施設と美術館をつなぐペデストリアンデッキ(全長60m)の鉄骨トラスにも竹を編んだようなデザインを取り入れている

2日目 歴史的街並みが残る戸次を歩く

江戸時代から続く街並みと昭和初期にかけて つくられた木造住宅を守るのは、今ここに暮らす 人々の熱意と決意、街を愛する市民の活動

大分市の南に位置する戸次本町には江戸時代末期から戦前にかけてつくられた街並みと貴重な建物が現在し、今も住まいや商店として使われています。古くは大分市の南部地域に広がる戸次荘の中核であり、江戸時代には日向街道と大野川が水運と交通の要衝だったことから市場ができ、在町(ざいまち)として栄えました。

中でも、戸次本町の大庄屋であった帆足(ほあし)家が、豊後南画・田能村竹田や儒学者・頼山陽など多くの文化人と親交が深かったことから文化を取り入れた街になったと言われています。この戸次本町の街並みをガイドグループ「杏(あんず)の会」のみなさんに案内していただき、帆足家本館の富春館(国登録有形文化財)や画家・帆足杏雨(きょうう)の生家で現在ご当主がお住まいの建物内部、木造3階建ての料亭跡など普段非公開の貴重な木造住宅を特別に見せていただくことができました。

現在、市と住民によって本町一帯で修景事業を実施しており、住民たちが主体となって街づくり推進協議会を組織。道路、公園、街灯、標識などを歴史的景観に合うように整備するなどさまざまな施策が実施されています。江戸時代から続く歴史的街並みとそれぞれの建物を維持することは、住まう方々の並々ならぬ熱意と固い決意があつてこそ



明治には養蚕業が盛んだったことから呉服店が多くあり、酒蔵で働く出稼ぎの杜氏たちは稼いだお金で家族に着物を買ひ、街は物とお金が循環していた

今に続いているのだということを、それぞれのご当主の話からうかがい知ることができました。地理が人を集め、建物が建ち、景観となり、そして何百年と続く歴史となる。まさに街づくりの起源に触れたまち歩きとなりました。



帆足家のご当主から酒蔵跡や富春館(国登録有形文化財)について直接話を伺うことができた



現在、歴史的建物にお住まいの方も、杏の会の一員として街並みガイドを行っており、熱意あふれる案内を聞くことができる

研修見学会

九州支部では、3月12日(火)～13日(水)の2日間、富山県・石川県を中心に研修見学会を実施し、脇山支部長を筆頭に21名が参加。研修見学会では、大建工業(株)・三協立山(株)でモノづくりの現場を学び、各地の歴史的建造物や隈研吾氏に関わった物件の視察を行い、充実した2日間となった。

○2024年1月1日に発生した能登半島地震で被害を受けられました皆さまに心からお見舞いを申し上げます。
一日も早い復旧を心からお祈り申し上げます。

1. 大建工業株式会社 井波工場

2024年3月12日 富山県南砺市にある、大建工業株式会社 井波工場を訪れた。同社は終戦からほどなく、富山県の豊富な森林資源を利用して建材事業を興したが、この工場は創業の地である利賀村に近く、登記上の本店となっている。

戦後、合板を製造していたが、当時、日本経済の復興に伴って鉄道、船舶が発展しており、その内装用合板の需要が伸びていることに着目。鉄道や船舶の内装用合板は特殊合板と呼ばれ、耐久性・耐水性が不可欠であった。特殊合板は難易度の高い技術が必要とされる分野であったが、同社は将来の発展を見据え、この分野にチャレンジした。研究の結果、高性能な接着剤を自社開発し、当時最も厳しかった米国MIL規格もクリアしたという。その特殊合板は日本国有鉄道の車両や船舶の内装に採用されたが、当時、車両分野で実績のない新参メーカーが国鉄に採用されることは快挙で、国鉄も驚くほどであったが、これが業績拡大の礎となった。

敷地面積57,000㎡(東京ドーム1.2個分)の広さに巨大な工場があり、220名以上が働いている。2024年1月1日に発生した能登半島地震の影響を受け、スタッフの中には被災した方もおり、工場もまた天井材が剥がれ落ちるなどの被害を受け、見学ルートの変更を余儀なくされたという。

案内を受けた工場はドア建具の製造を行っていた。場内は撮影禁止だったが、二階建ての明るく、広い工場は材料置き場、機械装置、完成品置き場などが整然と配置されており、人が作業できる部分、そうでない部分や、見学者のルートなどもきちんと床で区画分けされていた。広いワンフロアの空間に作業者は数名しかおらず、ほとんど

が機械化されている。

ドア建具の材料は二階までの吹き抜け空間の両側にストックされており、その中を機械が動き回り、材料を選んで二階に運び上げる。各住宅メーカー、工務店などから来るオーダーに応じて、オーダーごとに自動でドアの芯材が選択され、機械装置に流されていく。表面材の接着、側面材の貼り付け、穴あけ加工など、工程ごとに機械装置がQRコードを読み取り、必要な材料を自動で選ぶなど、機械作業化されている。

同じドア建具を一定期間、製造し続けるのではなく、一枚一枚異なるオーダーに対応しながらも、一日に3,000枚のドア建具を生産し、納品スピードも、オーダーから一週間以内に現場納材されるという。

環境に配慮しながら、いかに均一な品質で、効率的に製造し、材料の無駄が出ないようにし、また事故を起こさない、最新のドア建具製造現場を視察することができ、とても勉強になった。笑顔で受け入れて頂いた現地工場のスタッフの皆さま、また同行頂いた在木副支店長に感謝したい。



工場の概要に熱心に耳を傾ける参加者

2. 三協立山株式会社 三協アルミ社 福光工場

2024年3月13日 富山県南砺市にある三協立山株式会社 三協アルミ社の福光工場を訪れた。(写真①)同社は三協アルミニウム工業株式会社、立山アルミニウム工業株式会社という同じ富山県に創業したアルミ会社同士が合併し三協立山アルミ株式会社へと名を変え、その後、タテヤマアドバンス株式会社、三協マテリアル株式会社と合併し、三協立山株式会社となった。北陸にはアルミニウム関連の企業が多い。かつてアルミ精錬には大量の水と電気が必要とされたが、北陸には豊富な水とそれを活かした水力発電があ



三協立山(株)福光工場で記念写真

り、どちらの条件も満たしていたことに加え、加賀藩のもので栄えた高岡銅器の技術があったためといわれている。同社は富山県内に7つの工場を構えるが、そのひとつである福光工場は敷地面積118,215㎡(東京ドーム2.5個分)、建物面積55,308㎡で、住宅用のアルミサッシを製造している。

アルミサッシ製造は、アルミのインゴットからビレットと呼ばれるアルミ製品の元となる材料を製造するところから始まる。そのビレットを加熱しながら押し出し機へ挿入すると、取り付けられた金型の孔から、その形状をした細長い形材が押し出されてくる。形材づくりは、さながらところてんを押し出すようなものに近い。アルミサッシの複雑な形状はこの押し出しによって製造される。その後、腐食に耐えられるよう電気分解により表面が処理される。

この工場では同社他工場で製造された形材を利用しており、天井の高い建屋の工場では5～6メートルはあろうかというブラック、シルバー、ホワイトなどの形材が整然と立てかけられた状態でストックされている。膨大な量の多種多様な材料がストックされているが、絶対に間違っ

はいけない防火対応の材料は特別に赤い箱に入れられ、一目でわかるようになっている。管理が行き届いており、2024年1月1日に発生した能登半島地震でも数点の形材が倒れるだけの被害で済んだそうだ。

工場は幅も広いが、何より奥行100メートル以上にも及ぶ巨大な空間となっている。工場内は機械装置がほとんどを占め、見学した自動ラインの作業員は5名程度だ。無人にもみえるほどだが、形材がレーンに流され、機械と作業員が切断、穴あけ、切削加工や部品取付けなどを行っている。途中、一度でも落下した部材は廃棄される。品質を高めるためという。

この人数ではすべての機械装置を注視できないにもかかわらず、異常が発生した場合、作業員はスムーズに異常が発生した機械装置にたどりつく。装置ごとに設定された音楽が鳴るため、場内のどの場所にしようとも異常が発生したエリアがわかるように工夫されていた。

最終レーンでは、その製品ごとに必要な説明書と同梱部品が梱包されるが、製品に必要な部品は、これまた数十はあろうかというボックスに保管されている。それぞれにラ

ンプがついており、製品ごとにランプが光り、梱包作業員はその指示通りのボックスから材料をとり、それを梱包するだけで済む。

間違いを起こさない工夫と、品質を高める工夫が随所に見られ、とても勉強になった。こちらの工場でも働く社員の皆様からは快く歓待頂き、笑顔がとても印象的だった。またこの視察旅行に合わせて工場で待機頂き、説明を行って頂いた麻生副支店長にも感謝申し上げたい。(写真②)



座学では品質を高める工程への工夫を傾聴

研修報告書

株式会社 白岩



建物の設計は隈研吾氏

2021年、立山の裾野、富山県の白岩地区に新設された日本酒の酒蔵である。創立者は28年間ドンペリニヨンの醸造最高責任者を務めたリシャール・ジヨフロワ氏。仕事で足しげく日本に通ううちに、最初は「こんなものか」と特に気にも留めなかった日本酒に次第に興味を持ち始め、日本酒には様々な料理を受け入れる包容力があることに魅了されて、世界の人々に愛される可能性を秘めている日本酒造りの夢は膨らんでいった。

夢の実現には6年もの年月を要した。彼の考えを理解してくれる醸造元はなかなか見つからなかった。そこで、かねてから親交のあった隈研吾に相談したところ、富山の酒蔵、榊田酒造店 榊田隆一郎氏を紹介される。榊田隆一郎氏もまた革新的な経営者で、夢の実現のカギを握る人物となった。富山県内のいくつもの候補地を回ったあと、この白岩の地にたどり着いた。

ここは南に飛騨山脈が広がる霊峰立山の裾野、周りには田んぼ、遠くには富山湾が見渡せる。リシャールは自然豊かな土地と人々の暮らしに溶け込んだ「白岩」の酒蔵でありたいとの思いでここに酒蔵を建設することに決めたという。

建物の設計者は隈研吾。リシャールが富山にこだわったのは、この地に伝わる合掌造りのように、ひとつ屋根の下に居住空間と仕事のための部屋が共存する建物であること。ひとつ屋根の下で酒造りのすべての工程が一体となっ

た空間であること。周りの自然と人々の暮らしに調和し、出来るだけ地元のものを使った地元の酒蔵でありたいと望んだ。

「一般の見学客はお断りしています。」との言葉に一旦は諦めかけたものの、執拗にお願いして何とか承諾してもらった。見学当日はあいにくの雨模様だった。遠くから建物に近づくにつれ、大屋根が見えてくるのだが、全く違和感がなく、金属製ながら周りに溶け込んで

見えるのはとても深い茶色の屋根だからだろうか。シャープな形は葺いたばかりの合掌造りの茅葺にも似ている。建物の周りには雪が残っていた。いつもの年はまだ周りは雪の原だという。富山県産の焼杉の外壁とエントランス左手の「IWA」の表札はとても謙虚でおしゃれだ。

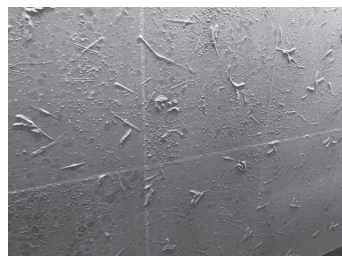
案内してくれるのはフランス人のグラセ氏。前以てメールでやり取りしたときも全く問題なく、話し方も流暢な日本語で驚いた。エントランスを入るとガラス張りの広い土間がある。床は炭を練りこんだ炭コンクリート。コンクリートの冷たさを和らげている。真ん中のベンチとテーブルは、富山市内の神社の切り倒された杉をもらい受けてつくらせたそう。多目的に使える空間となっている。そこに座ると周りの自然に包まれるようで、とても癒される。あいにくの雨で見ることはできなかったが、晴れた日には霊峰立山や遠くには富山湾も見渡せるという。また、反対側はこちらもガラス張りで整然と並んだタンクで作業をする職人の姿を見ることができるようになっている。残念ながら当日は酒造りが一段落した後で、職人たちの姿を見ることはできなかった。天井は富山県産の杉を使ってデザインされた垂木がベンチとテーブルとともにモノトーンの中に温かみを醸している。壁は和紙を貼っている。この和紙は、コロナ禍で仕事がなくなった地元五箇山の和紙職人を集め、10000枚の和紙を渡かせたという。和紙には前の田んぼで作られた酒米のもみ殻が練りこまれており、独特の

風合いでコンクリートの壁をやさしく覆っている。漉くのが大変で、使えなかったものも多かったそうだ。地元とともにというコンセプトがあちこちに見える。蔵が出来上がった



た時、リシャルは想像を超える出来栄に驚いたという。

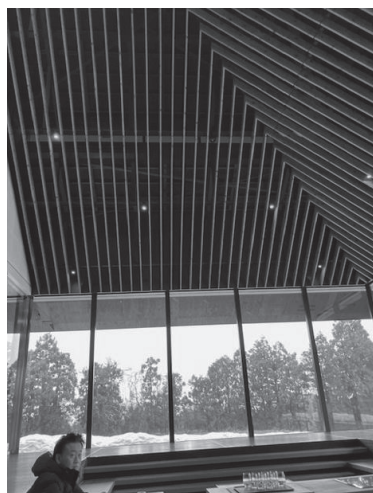
酒造りには生酏づくりを採用。生酏づくりは昔ながらの製法で、直接乳酸菌を入れる速醸元製法と違って自然の力で発酵させる製法で、労力と時間を要するが、時間をかけて生まれた生酏は力強く深いコクのある酒質に仕



壁は和紙を貼ったもの
地元五箇山の和紙職人の作

上がるという。さらにリシャルが得意とするアッサンブラージュ(ブレンド)の技法により複数の酒を調合し、理想とする「新しい日本酒」に仕上げていく。複数の酒米と複数の麴を使って醸造した酒を混ぜ合わせる。IWA5は20種類の酒を調合したそうだ。最後に試飲をさせてもらったが、芳醇な香りとまろやかでしかも切れのある味わいで、しばらく後を引く香が印象的だった。

純粋を好み混ぜ物を嫌う日本人には、直ぐに受け入れられるだろうかとの問いに、そういう声は聞かれるとのこと。どのように日本中に、また世界中に広がっていくか、先が楽しみだ。



天井は富山県産の杉を利用



永平寺

鎌倉時代に宋に留学した道元は、帰国後比叡山の迫害を逃れて、1244年福井の地に傘松峰大仏寺を開き、2年の後に永平寺と改めた。禅宗の一派曹洞宗の総本山である。

開山以来何度も火災にあっており、現存の建物は近代以降の建築であるが、ほとんどの建物が国の重要文化財に指定されている。山の斜面に沿って立ついくつもの伽藍が回廊で結ばれている。山門は1749年建造、現存する建物で一番古い。両側に2体ずつの四天王像が安置されていた。仏殿は永平寺の中心ともいえる建物で、本尊の三世仏が祭られている。三世とは過去、現在、未来をさし、それぞれ久遠実成の釈迦、方便の釈迦、無量寿の釈迦を言う。そのほかに、達磨像、道元の師、如浄禅師の像も安置されている。大庫院は1930年建造。通常の寺院の庫裏にあたる建物。傘松



豪壮な折上格天井の傘松閣大広間

閣は1902年、永平寺二祖孤雲懷奘の650回忌に合わせて建造された。豪壮な折上格天井の222畳の大広間がある。天井の格子の中の一つ一つに当時活躍していた日本画家144名の手による絵が描かれている。承陽殿は開祖道元の廟となっており、その後5代までの貫首の御霊が祭られている。

訪れたときは3月半ばで雪は少しだけ残っており、冷たい雨が降っていた。境内の木々には雪吊が施され、大屋根には雪が一度に落ちないように？と思われる雪止めが数本渡してある。多くの建物をつなぐ回廊を含め、雪国ならではの工夫であろう。帰り際に山門の外



回廊



中雀門



山門の四天王像



承陽殿

金沢海みらい図書館

金沢市の西部に位置する市立の図書館で、世界で最も美しい公立図書館25選に選ばれている。2021年に開館して以来、海外からの建築家協会など専門家の見学ツアーが訪れ、現在は兼六園や21世紀美術館に続いて金沢の新名所となりつつある。

設計はシーラカンズK&H。総工費45億円。

図書館は書架が壁にぎっしりと並んでいる印象が強いが、ここは書架は壁から離れて自立している。金沢は雪が多いのでトップライトは有効ではなく、明かりを取り込むためにパンチングウォールを採用した。昼間は壁の穴から太陽光が差し込み、夜になると室内の明かりが外に漏れて美しい。円窓は20cm、25cm、30cmの3通りの大きさのものがデザイン的に配置されている。内側の方が外側より大きな円(38cm 41cm 44cm)となっていて、外側から見たときと大きさが視覚的に同じに見えるように計算されている



1F内側から

そうだ。また均一な光が入ってくるように、ガラスブロックは熱線吸収ガラスや網入りガラス、すりガラスなど場所によって種類が変えられているとのこと。ガラスにはセラ

に鐘楼を見つけた。大晦日のゆく年くる年に中継される雪の永平寺を思い出した。



金沢海みらい図書館

ミックプリントが施され、室内に水玉模様が浮き上がることを防いでいる。そういわれれば、無数の丸い光が室内に漏れていても不思議ではないのに、室内は均一な柔らかな光につつまれていた。2階と3階は吹き抜けで開放的な大空間となっている。天井部分には照明がなく、丸窓のひ



かりと書架の照明、階段室の補助照明に必要な照度は確保されている。全体が明々と照らされていないので、落ち着いた空間となっている。室内の空調は床下を利用した自然換気システムが採用されて、エコにも十分配慮されている。

図書館は20:00閉館。私たちが訪れたのは18:40頃だったが、帰りには巨大な行燈のようなデザインで無数の丸窓から漏れる光が斬新で美しかった。

金沢駅

世界で最も美しい14の駅舎の一つに選ばれている。アルミのフレームにおよそ3000枚の強化ガラスがはめ込まれたアルミトラス構造の建築は日本は勿論のこと、世界でも最大級だそう。ドーム天井の大きな鉄製のリングは、ドームの形を維持するのに構造上大切なテンションリングとよばれるものでデザイン的にはアクセントになっている。大きな球体から三味線の撥の形を切り取ったようなドームは「おもてなしドーム」と呼ばれ、雪や雨の多い金沢の街で駅を訪れる人に傘をさしかけるような優しい心遣いを表現したと言われている。

そして、前面に堂々と立つ大きな門が鼓門である。金沢は前田家が能の生田流を厚く庇護したことから能楽が盛んで、武家社会だけでなく一般にも浸透してきたことで、能楽に使われる鼓を表している。能は武家社会でお祝いや儀式には客をもてなすために必ず演じられたことから、この門もおもてなしの心を表している。

設計は建築家白井龍三、2015年に完成。構想から12年の時間を要している。設計に際して金沢市からの要望は「金沢らしさの創出」「駅の機能の確保」「徹底したバリアフリーの実現」だった。金沢の公共施設の建設では計画が持ち上がってから市民も含め各方面の意見を取り入れ年月をかけて十分に議論したうえでコンセプトに基づいた建物が建設されているように思う。図書館や美術館でも同様だった。設計が出来上がった後、専門家だけでなく一般の市民も参加する懇話会で、金沢には瓦が必要との意見が多数出され、それによってあとから加わったのが鼓門だった。これも民意の高さ、文化レベルの高さだと思う。

また、金沢駅は旧市街と新市街の境目にあり、鼓門は旧市街への入り口としての意味を持たせているそうであ

る。そしてこの大きな門は、金沢の伝統工芸に恥じない「ゆるぎない美を体現」している。ねじられた柱の内側は鉄骨が補強材として使われているかと思っただ、送水管が設置され、ドームや鼓門に降り注いだ雨や雪を地下に流す仕組みになっているそうだ。



金沢駅東口「鼓門」

駅舎に入るとコンコースのあちこちに金沢らしさがちりばめられている。大樋長左衛門による壁面の大きな作品や柱に詰め込まれた金沢の伝統工芸の作品の数々。ホームには上がれなかったが、ホームの柱の上部には金箔が貼られた飾りも取付けられているという。また、駅ホームの可動式ドアは九谷5彩のうちの4色、赤色・黄色・紫色・

緑色が使われており、新幹線が到着すると車体の紺青色のラインが加わって九谷五彩が揃う仕掛けになっているという。

金沢港口の入口の脇の壁面には九谷焼の陶板による大きな作品があり、屋根には雪吊をイメージしたようなトップライトが設けられていた。駅舎の外は公園のようになっていて、兼六園にも引き込まれている「辰巳用水」が小さな流れを作っている。通常駅などでは見られない篠竹が植わっているのも珍しかった。この駅前の空間を美しく保つために一役買っているのが鷹匠だ。国内のどの駅もカラスの糞公害に悩まされているが、金沢駅では週に1回鷹匠が鷹を使って縄張りを主張させているためカラスや雀などの鳥が集まらないことで駅周辺を美しく保つことができているそうだ。これも伝統が



金沢駅東口「おもてなしドーム」



鼓門のライトアップ

息づく金沢ならではの発想だと思う。

400年の歴史を持つ金沢の美の伝統と現代の建築技術が融合した金沢駅は国内に限らず広く海外からのお客様を迎えるのに最高のおもてなしの空間となっている。



市制100年記念モニュメント「悠颯(ゆうよう)」



おもてなしドームの天井・テンションリング



大槌長左衛門の作品

兼六園

日本三名園の一つ、金沢城の傍にある回遊式の庭園で、雪の季節になる前の雪吊の作業風景がテレビなどでもおなじみである。

前田家5代藩主綱紀によって最初につくられた瓢池とその中に浮かぶ2つの島からなる庭園から、歴代の藩主によって付け加えられ今の形になった。庭園は神仙思想をもとに、海、山、川など自然を凝縮した形で作られている。

全国に残っている庭園の多くは敷地内に湧水があり、それを中心に水の流が形作られているが、兼六園は庭園内に湧水はない。水は10キロ以上離れた犀川の上流から引いた辰巳用水が使われている。

もともとは1631年の金沢大火の後、金沢城の防火防衛のために3代藩主の命で、町人で土木技術者の板屋兵四郎がわずか1年足らずで完成させたものである。途中に

は長距離のトンネルもある難工事をすべて手掘りで完成させた。水は一旦兼六園の霞ヶ池に蓄えられ、そこから地下



瓢池と翠滝・夕顔亭



霞ヶ池と雪吊

の導水管を通して城の内堀から二の丸に送られて、反対側の外堀に至る。サイホンの原理である。園内にある日本最古の噴水は、城内に水を引く際に試作されたものだといわれている。現在も一日1400トンの水が運ばれているという。辰巳用水は金沢駅にも引かれている。

板屋兵四郎は辰巳用水のほかにも市内を網の目のようにめぐる数々の用水路の建設を行った。輪島の尾山用水、春日用水などの工事にも携わったと言われている。板屋兵四郎は金沢市上辰巳町の板屋神社に御神体としてまつられており、金沢のまちづくりに彼の功績がどれほど大きかったかがわかる。



日本最古の噴水



蓮池門



金沢城址

度重なる火災で現在は櫓と城壁のみが残る。天守が焼けた後、城主の執務と居所となっていた二ノ丸御殿が1881年、当時所管していた旧陸軍の失火によって消失し、現在は城壁と櫓などが残っている。石垣の上の城壁は腰壁が平瓦張りのナマコ目地仕上げで瓦と白い目地のコントラストがモダンで洗練された感じがする。創建当時の天守は非常に美しい姿だったと想像できる。屋根は積雪に耐える軽い鉛瓦でできているそうで、戦時に砲丸に作り変えるための防衛策の面もあった。

石川門から場内に入ると、石川門周りの石垣は特に石

と石が隙間なく組まれ、表面が面の丁寧な仕上げとなっている。城内の二の丸前の石垣は石川門までではないが、こちらも丁寧で繊細な積み方だ。城壁も美しい平瓦貼りナマコ目地仕上げで、両側に櫓を持った長い壁はとても美しかった。壁のところどころに出ている出窓のようなものは緑色に塗られていたような跡があった。創建当時は色使いもあざやかで美しい姿であったことが容易に想像できる。美しい城は北前船の交易によって栄えていた豊かな町金沢の象徴だったのだろう。



石川門周りの石積み



石川門



金沢城 五十間長屋

金沢21世紀美術館

2004年開館。設計者は妹島和代、西沢立衛 (SANAA) で、西沢氏はこの建物などによりヴェネツィア・ビエンナーレ第9回国際建築展で最高賞の金獅子賞を受賞している。環境・設備デザイン賞、グッドデザイン金賞、日本建築学会賞作品賞、インターナショナルイルミネーションデザイン賞を受賞している。「工芸とデザインの町金沢に刺激を与え

活性化し、新しいものを生み出す土壌を育成する」事、「まちに生き、市民と作る参画型の美術館」を目指している。

早くから準備に入っており、収蔵品に関しては1990年代半ばから収集を始めている。収集の考え方として、地方都市であることもあり十分な資金が使えないため、購入金額の上限を設け、学芸員がピーク目の作家の作品を見

極めて購入している。地方の美術館としては驚異的な年間258万人の入場者数を記録(2020年度)している。

広い敷地の真ん中に大きな円形のガラス張りの建物が建ち、周囲の芝生の上には現代アートのオブジェがいくつも展示されている。円形の外周はガラス張りになっておりその内側が回廊となっている。ガラスの外壁を通して芝生



の上の展示作品が見える。参画型の美術館のため、イ



ベントが多く行われるとのこと。広い立派な保育室も整備されている。電気を使わない油圧式のガラス張りのエレベーターなど環境に配慮した設備も採用している。我々が訪れたときは能登半島地震の2か月余り後であったが、地震の影響で展示室はほとんどが閉鎖されており、わずかな部分しか見るができなかった。特別展示室のほか常設の斬新なアートが見られなかったのが心残りだった。



21世紀美術館の内側から

ターなど環境に配慮した設備も採用している。我々が訪れたときは能登半島地震の2か月余り後であったが、地震の影響で展示室はほとんどが閉鎖されており、わずかな部分しか見るができなかった。特別展示室のほか常設の斬新なアートが見られなかったのが心残りだった。

大樋長左衛門窯

金沢の代表的な焼物というと九谷焼を思い浮かべる人が多いが、九谷焼と対照的な彩色のない大樋焼は前田家のご用達窯として茶道具を中心に358年の歴史を持つ楽焼の脇窯である。脇窯とは、楽家以外で楽焼をつくる窯元で、現在では伝統的な楽焼の技法を守っている日本で唯一の脇窯である。開祖は京都の楽家の4代に師事した高弟、土師長左衛門である。

隈研吾が茶室の改修工事にかかわったと聞いて見学に訪れた。茶室は売店の隣にあった。水差や香盒は楽、炉縁は詩絵、肩付きの大振り釜。風呂先屏風は当代の作品ではないだろうか。茶道具の説明書きはなかったが、季節によって茶道具は歴代の長左衛門の作品に変えられるのだろうか。柿渋で仕上げたのだろうか、濃い茶色の鴨居や柱の中で床柱の白木と漆塗りの床框がアクセントとなっている。簡素なたたずまいの茶室で、実は極上の空間。奇をてらわない普段の気軽さを演出した室礼は茶道の極意ともいえる。俵屋宗達作の衝立がさりげなく控えの間の片隅に立ててあった。

同じ敷地内に美術館があり歴代の長左衛門の作品が展示されている。大樋窯の特徴の飴釉は初代が楽家から使

用を許されたもので、大樋窯では大切に守られている特別なものであるとのこと。大樋窯はろくろを使用せず手びねりで形を整える製法で、雪深い北陸の地でその厚みのある茶器は保温性も兼ねているところからも愛されてきたのではないだろうか。いびつな形から温かみと型にとられない野性味、エネルギーを感じさせる。

初代から当代まで作品を見比べてみると、当代は、活動の領域は陶作に限らず壁画などの大作からインテリアやデザインなど、才能をいかんなく発揮して突出しているかのように見えるが、その斬新さは初代をはじめ歴代の作品からも垣間見られる。大樋窯の伝統ではないだろうかと思った。

売店で一番高価な茶碗を手にとってみた。茶碗は重厚に見えて手に取ると軽いものが上物と言われるが、まさにそれを実感するものだった。売店脇で茶室を臨みながら抹茶をお願いすると、茶碗をいくつも盆にのせて持っこれ、好きな茶碗をお選びくださいという。選んでいくと、それは十代長左衛門、七代長左衛門、八代、九代とそれぞれの長左衛門の手による作品でお茶を喫することができる。窯元ならではの贅沢な一服だった。



茶室の改修工事には隈研吾氏が関わった



新規会員紹介

2024年4月から6月までに入会されました企業を紹介します。みなさん、よろしくお願いします。

(有)イスト

1種C正会員

代表取締役 大城 満昭

沖縄の風土気候・特性・環境(地震・台風・白蟻・湿気対策)を深く理解した上で木造住宅の建築設計をしております。

〒901-1117 沖縄県島尻郡南風原町津嘉山433

イストビル2階

TEL : 098-888-5883 FAX : 098-888-5685

<https://ist-okinawa.com>

(株)市毛建築設計事務所

3種正会員

代表取締役 市毛 あすか

建築の企画・設計・監理、都市・地域計画およびこれらに関連するコンサルタント業務を行っています。

〒311-4152 茨城県水戸市河和田2-2190-7

TEL : 029-253-1331 FAX : 029-253-3511

<https://ichige-arc.co.jp>

(株)ウッドコンストラクション

1種B正会員

代表取締役 林 知秀

住宅の製造小売体制により、国産材を使った高品質な住宅を安定的に供給。木を知り尽くしたウッドフレンズグループだからできる心地よい木の住まいをご提供します。

〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄4-5-3

KDX名古屋栄ビル2階

TEL : 052-249-3084 FAX : 052-249-4266

中村建設

賛助会員

代表 中村 健治

地域に支えられて4代続く建設会社です。

〒840-2104 佐賀県佐賀市諸富町徳富1156-1

TEL : 0952-47-2316 FAX : 0952-47-2316

羽田建設(株)

1種B正会員

代表取締役 羽田 博人

羽田建設の家づくりは、お客様に伝える情報の透明性と公的な性能基準を提供する技術と品質。

〒500-8223 岐阜県岐阜市水海道5-1-19

TEL : 058-246-9327 FAX : 058-248-1216

<https://www.hadanoie.jp/>

(株)ヒロ建工

1種B正会員

代表取締役 吉澤 広司

埼玉県を中心に一般建築工事から分譲住宅・土地活用・賃貸住宅・リフォーム工事の建築事業を展開しています。

〒359-1163 埼玉県所沢市西狭山ヶ丘1-2420-1

TEL : 04-2968-3700 FAX : 04-2968-9400

<https://hirokenkou.co.jp>

(一社)MEAS

賛助会員

代表理事 田中 俊行

住まいの長期保証(初期20年/最長60年)のご支援をはじめ、皆さまが抱える課題と一緒に解決していきます。

〒104-0042 東京都中央区入船2-2-2

PMO八丁堀V11階

TEL : 03-3527-3166 FAX : 03-3527-3167

<https://www.meas.or.jp>

(株)モード・デザイン

1種C正会員

代表取締役 野間 博文

家族構成やライフスタイルの変化など、暮らしのニーズやお客様の要望に応えた工事を心がけています。

〒712-8011 岡山県倉敷市連島町連島515-1

TEL : 086-486-4858 FAX : 086-486-4868

<https://mode-design.jp>

遊和工房(株)

1種C正会員

代表取締役 山崎 裕二

長崎県で新築・リフォーム・リノベーション・外構工事・土木工事などを営んでおります。家族の物語を育む住まい造り。

〒856-0809 長崎県大村市沖田町124-1

TEL : 0957-51-4974 FAX : 0957-51-4974

木の匠

Historia
ヒストリア



〈群馬県桐生市〉

彦部家住宅

「彦部家住宅」は、江戸初期に建てられた中世豪族の屋敷構えが良好に保存されている遺構である。彦部家は、天武天皇の皇子 高市親王を祖とする旧家で、室町時代は足利將軍の直参として仕え、幕府から関東監察の命を受けて桐生・広沢郷に着任した。その後、徳川家康の関東移封の後に帰農するが、手臼山麓に広がる一町六反(16,000㎡)の大地主であったという。屋敷の南面に長屋門、中央に主屋、その東脇に冬住み(隠居所)、北側に文庫倉と穀倉が立っており、これらはすべて江戸時代初期に建築されたもので、国の重要文化財である。

特に、主屋は天正年間(1580年)頃に創建され、慶安年間(1650年)頃に現在の姿に改築されており、日本の古民家のうちでも最古のものの一つである。入母屋造り、茅葺で、正面約18m、奥行11mと規模が大きく、向かって右半分は土間と板間からなり、左半分は居室部で、表座敷、広間、奥座敷、裏座敷、納戸の五間取りとなっている。柱材は、ケヤキ、クリ、クルミなどの雑木を使用し、小屋組の梁も不揃いな木材を使用しており、400年近く前の木造建築の時代性を物語っている。

主屋は、平成7年より全面的な解体による保存修理工事が行われ、平成10年6月に創建当初に近い形で復元された。この後、長屋門、冬住み、文庫倉、穀倉についても修理が行われ、平成12年12月に完成した。

彦部家住宅 国重要文化財

建 築	天正年間(1580年)頃
所 在 地	〒376-0013 群馬県桐生市広沢町6-877
電 話	0277-52-6596
入 館 料	大人500円 小・中学生300円
開 館 日	土・日・祝祭日
開 館 時 間	午前10時～午後4時
所 有 管 理	彦部家

<https://www.mokujukyo.or.jp>



一般社団法人

日本木造住宅産業協会



木 芽

2024年7月20日発行

Vol.189

発行人 加藤 永

編集 業務・広報部

〒106-0032 東京都港区六本木1-7-27 全特六本木ビル WEST棟2階

電 話 03(5114)3010(代) FAX 03(5114)3020